クラシック巡礼 ５

シ ュ ー ベ ル ト の 風

サイト掲載： www.i-s-m-kk.co.jp/

２０１９年 ２月 ２４日

別当　勉

〈betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp〉

プロローグ

想い出のシューベルト巡礼１「即興曲」

2009.12.28、2018.12.26改　別当　勉

五味康祐は、内燃する激情をほのかに包んだ楽曲が好きなようである。その代表例としては、僕も彼の「音楽巡礼」著述に誘われて聞いてしまった、フランクのバイオリン・ソナタ（第３楽章）が掲げられる。彼の告白的述壊によれば、愛人が出来て本気にさせたのは、このソナタだという。彼女の芳しい雰囲気と控えめな色気が酷似しており、離婚して一緒になろうと決断を迫られたのが、このソナタであったという。が、少し覚めて考えたら、もう一人の恋人、愛聴スピーカーであるオートグラフは地下室で、大きすぎて運び出せない事情を思い出した。まるでグランドピアノみたいに。さすがに、クリプッシュ型の屈折バックロード・ホーンが作りこまれた銘機だから、しかも全部が無垢のイングランド・オーク造りで高さ１５０ｃｍのコーナー据置型である。惚れ抜いた甲斐のある愛人と感じたのも仕方ないほどの逸品であった。それほど、音楽無しでは人生が定義できなかったのであろうか。

さて、僕の好きなジャンルには、抒情がある。と言ったら、もうシューベルトしかいない。不思議な人である。いくら悲痛なマイナー曲、例えば弦楽四重奏曲「死と乙女」などを作曲しても、抒情性がとれないのだから。

その推薦盤として「即興曲」をとりあげたい。全部で作品９０と作品１４２の二組あり、各４曲計八つのピアノ曲から成る。抒情とは英語でリリシズムという。余り感情の揺らぎはなく、穏やかな春の日差しの中での田園風景というか、どちらかというと「香り」に近い印象的な味わいのある感じである、というのが僕の定義だ。たとえ嵐の中でも、映画で丘の上から眺めるような感覚である。とても穏やかな日々の中で聞くというのが、最高であろう。

作品９０の４曲から始めよう。やはり、第３番のアンダンテが白眉か。

最初は、ウィルヘルム・ケンプのピアノで何度も聞いた時には、脳の聴感を通過していて一向に刻まれない。ふと、ある時ＦＭ放送でホロビッツのライブ演奏の第３番に目が覚めた。流れるような感じ以上の滑るような、まるで、ギターの夢見るようなトレモロ連続音に呆気にとられた。ピアノ打鍵なのにギターのように聴こえた。演奏の醍醐味とはこれだ。はんぱなありきたりの解釈では、名曲が駄作になってしまうのも解る気がした。神経質な天才ホロビッツの柔らかできめ細かな大胆さに驚くばかりだ。とにかく、シューベルトの少し瞑想的な哀愁と風景が、スピーカーの前に出現するのであるから、痺れてしまう。

［註］ **白眉：** 白いまゆ毛

古くは、「蜀書（馬良伝）」による。蜀の馬良が、五人の兄弟の中で最も優秀で、その眉に白毛があったことから兄弟中で最も優れている者。また、衆人の中で最も傑出した者、同類中で特に優れているもの。

また、白いまゆ毛の仙人が秘める超絶的な見識と技巧をイメージすることも当てはめていいかもしれない。例えば人間国宝であり、プロの中で「ズバ抜けたプロ」と考えればよい。

ウラジミール・ホロヴィッツ （１９０３－１９８９年）

２０世紀のレジェンドになった、余りにも有名なピアニストである。ウクライナ生まれで１９４０年に米国に移住した。彼の夫人は、大指揮者トスカニーニの娘であった。

とにかく神経質だったと言われているが、音楽の深さを知らない人々が言いそうなセリフのように聞こえる。

彼は、とにかく「全集」ものを一切、録音していない。かつ、ほとんどがライブ録音であり、スタジオ録音はほとんど見当たらない。契約先のCBSスタッフは、ライブばかりなので、彼の好きなように住まいの練習室に録音機器をすべて設置して、いつでも好きな時にレコーディングできるように勧めたそうだが、これも断られた。ということは、彼は真剣勝負のライブに徹底して拘ったのである。

https://ameblo.jp/galwayera/entry-12265157963.html

私は、ホロヴィッツのＣＤを数枚持っているが、いずれもＦＭで聴いた

シューベルト：即興曲作品９０－３

演奏：ウラジミール・ホロヴィッツ

https://www.youtube.com/watch?v=FxhbAGwEYGQ&list=RDFxhbAGwEYGQ&start_radio=1&t=0

を探すために買い込んでしまった。ようやく５枚目ぐらいで遭遇できた。　まさに、これを「巡礼」というのであろう。

オートグラフ

このシューベルト巡礼を始めた原点が、プロローグのとおり「即興曲」であった。はるかな昔に、四畳半のくたびれた部屋で、トリオの古臭い１６ｃｍブックシェルフ・スピーカーで聴きながら、蹉跌だらけの青春時代である。そのまま行けば、さまよえるホームレスに近いのだが、手にすることができない豪華なステレオでなく、オンボロで済ましながらも、いつのまにか音楽鑑賞の深みにはまっていた。それが、満たされない欲望で錯綜した精神状態は、「楽曲の美」を吸い取ることによって、心の重心を定めることが出来たのである。

オーディオの話は、ついでのことではあるが、透き通るような美しい音も、クラシック巡礼では欠かせない。深い興味を抱いた例を掲げてしまった。

「音楽巡礼」の五味が愛したタンノイのオートグラフという口径３８ｃｍの同軸２ウェイのユニットを内蔵した巨(おお)きなスピーカー（右）に興味津々で、僕の憧(あこが)れは果てしがなく、池袋のヤマハ楽器店に入りびたりで、図々しく何時間も試聴したほどだった。

その構造は、クリプッシュ型の屈折バックロードホーンで、材料は、すべてイングランド・オークの無垢(むく)である。右のとおり、コーナー据置型で奥深い寂(さび)をかもしながらも堂々とした外観である。高さは約１５０ｃｍもあり、重量は約９０ｋｇ／台だから、一度置いたら動かすには、プロに依頼するしかない。左右二台でグランドピアノのようだ。

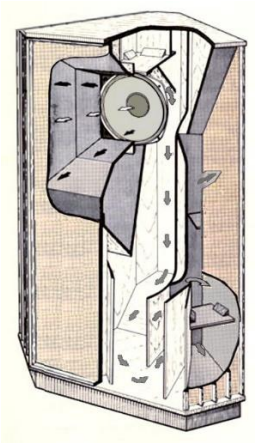
From <http://soundcreate.co.jp/tannoy-autograph>

当時の私には、まさに、３０年以上も高嶺の花であったが、古楽器みたいに、今はもう製造していない。欲しければ、古機をネット・オークションなどで求めるしかない。つまり、オーディオの世界遺産的な名機になってしまっている。

サランネット外した外観

From <https://aucview.aucfan.com/yahoo/w158137881/>

オートグラフの構造



From <https://blog.goo.ne.jp/royce7799/e/cc603082f354b433fedfaf38fae88fc7>

プロローグで掲げた

セザール・フランク作曲： ヴァイオリン・ソナタ イ長調

第３楽章 レシタティーヴォ・ファンタジア

https://www.youtube.com/watch?v=ADYQzxq9pXY

は、世界中のヴァイオリニストにとっては、いわば定番の曲になっている。その美麗さは喩(たと)えようもない。特に、第３楽章“レシタティーヴォ・ファンタジア；Recitativo-Fantasia”は、慕情の熱が蠢(うごめ)いている。惚れた、というよりも、その仄(ほの)かに漂う麗(うるわ)しき彼女の優しさとは、こういう音曲(おんぎょく)を言うのだろう。はかり知れないほどの情愛が香ってくる。一度聴けば、五味が「音楽巡礼」で取り上げた所以(ゆえん)が明白となる。

このような豪華なスピーカーと愛人とを、本当に秤(はかり)にかけたのだろうか。われわれ凡人の常識からしても、常軌を逸している。最近になって、長年の疑問がようやく解けた。「音楽巡礼」を再読した結果、妻との関係が悪化していた五味は悩みに悩んだ挙句(あげく)、大正～昭和の文豪である佐藤春夫（1892–1964）を訪ねて、その愛人を連れて引き合わせたという。佐藤は五味の先輩以上の師匠のような存在であった。しかも、クラシック鑑賞の手ほどきを受けて、以後、幾度となく指南されてきたほどの親密さであった。

以下、五味康祐の語りを引用する。

#　　#　　#　　#　　#　　#

・・・・・“ダフニスとクロエ”に想いを托した女子大生へ、しだいに私がのめり込んでいた時だ。一度、佐藤春夫先生宅へ彼女を伴った。佐藤先生は素敵な乙女だと彼女を誉められた。そこへ佐藤夫人が外出先から帰ってこられた。夫人は、私の妻をよくご存じで、激しい口調で私を叱られた。妻以外のそんな女性を佐藤邸につれてくるとは何事か、というわけだ。私はむっとした。叱るなら何故彼女のいないときに私を呼びつけて、叱

られないのか。彼女が傷つくのが私には耐えられなかった。私はそういう人間だ。（夫人は）いつも自分のことは棚にあげて人さまを詰ろうとする。彼女の前で叱られればこちらは意地にでも彼女をかばう。

ところが、夫人が叱られると佐藤先生までが、口うらを合わせ、「そうだ五味、きみはけしからん。とっとと帰れ。以後出入りはゆるさんぞ。」と言われたときには、あっ気にとられ、いっぺんに肚がすわってしまった。私は彼女を見捨てるわけにはゆかぬ立場に自分がおかれたのをこの時感じた。あとからおもえば、彼女は傷ついて私の妻は傷つかないのか？　そんな怒りを込めた夫人の叱声だったとわかる。・・・・・

#　　#　　#　　#　　#

と、ここまでしか五味はつづっていない。私は、佐藤夫人の言うことは、至極当然の如く理解した。しかしながら、そんなことは真っ当なご婦人方であれば、当然のことである。最初から判っていたはずである。たしかに、作家の表現には、いつもながら韜晦がつきまとう。そこで、佐藤春夫の生涯を調べたところ、なんと、彼の夫人は、谷崎潤一郎の妻であった。

谷崎潤一郎が妻千代に冷淡なのを見て同情から恋に変わり、谷崎はいったん佐藤に妻を譲ると言うが、谷崎は妻の妹せい子と再婚するつもりでいたが、せい子に断られ、妻が惜しくなって前言を翻したため、谷崎と交友を断つ。谷崎は当時小田原に住んでいたためこれを小田原事件という。失恋に苦しみ、代表作である「秋刀魚の歌」などで千代への思慕を歌った。結局、谷崎潤一郎の妻・千代を、1930年（昭和5年）に譲り受けた。谷崎と千代の離婚成立後、3人連名の挨拶状を知人に送り、「細君譲渡事件」として新聞などでも報道されて反響を呼び起こした。〈https://ja.wikipedia.org/wiki/佐藤春夫〉

「細君譲渡事件」は、戦前の日本文学界を賑わせた一大スキャンダルとなったようだ。この痴話的出来事は、昭和４２年に成人した私には、知る由もない。

そういった背景ゆえに、世間の冷眼をしり目に、敢然と不倫を乗り越えた佐藤夫妻に、五味は、理解と助言を期待しながら愛人同伴でうかがったのだろうと、ようやく私の疑問が氷解した。それが、想定外の猛烈な譴責として反感を買ったから、呆気にとられる以上に、同伴した愛人に対して面子丸つぶれとなった。が、それよりも真っ向から否定された彼女の余りにも深すぎる傷心を思いやると、悔み切れないほどになってしまったのだ、と想像できる。

でも、五味はそこまで書かない。以前の私には不満であったが、この年になって「クラシック巡礼」を書くようになってから、何故か、韜晦という作家魂が少しだけ肯けるようになってきた。

クラシック巡礼：　シューベルトの風

２０１９年1月１１日　別当　勉

From <http://tetsu.symphonic-net.com/schubert.html>

シューベルト（1797 - 1828）とは、どんな青年だったのか。余り追及されてこなかった。解っていることは、３１歳の夭さで逝去してしまったことである。おそらく、音楽史上、一番短い人生だったにちがいない。が、邦人作曲家まで言及すれば、滝廉太郎（1879 - 1903）は２３歳の生涯であったから、厳密には記録とはならないとも言える。いずれも、歌曲の作曲家であり、その歌は麗しく永遠の生命力がみなぎっている。数で比較してはいけないが、彼らの歌の芳しいまでの深遠な奏べに聴き入れば、自ずから、日本のシューベルトは滝廉太郎ぐらいしか見当たらない。

フランツ・ペーター・シューベルトは、６００以上も歌曲を創った。D*番号で整理された全曲数が９６５であるから、およそ２／３がリート（歌曲）で占められている。

D: ドイッチュ番号は、シューベルトの作曲した作品に付けられている番号。オットー・エーリッヒ・ドイッチュによって1951年に作られた英語の作品目録で附された番号である。

ゆえに、歌曲（リート）を語らなければ、フランツには迫れない。恥ずかしながら、私は興味はあったのだが、どうもドイツ語の歌詞で唄われるバリトンやソプラノたちの声がもどかしく、あまり聴いてこなかった。声音がこわいドイツ語というのは、シャンソンのフランス語やカンツォーネのイタリア語とは違って歌に向いていないのではないか、と疑問を抱いてきた。１９６０年代は嫌というほどビートルズの英語に慣らされてもいた。だから陶酔するまでには至っていない。評論家たちの推薦により３０年ほど前に買い込んでしまった、稀代の名バリトン歌手であるディートリッヒ・フィッシャー＝ディスカウのＣＤ数枚を、このシューベルト巡礼を書きながら聴きこんでいる始末である。こんな拙いリートの聴取経験にあってもシューベルトに拘らざるを得なかったのは、この大家を経なければ、私の巡礼が座礁するからである。

このため、フランツに魅かれてきた器楽曲などをパイロットにして、彼のおびただしい数のリートに分け入っていく。すでに、私たちは多くのシューベルト歌曲を文部省唱歌として小中学校で習ってきたから、幸いにも、身構える必要はなく、極めてスムーズに溶け込める。

フランツが創った歌曲は、数だけでも次表のとおり、飛び抜けている。毎年、平均３６曲ほど（作曲活動期間：１８年間）書き上げていた。まさに驚異的である。

ドイツ・オーストリア圏における名作曲家と歌曲数

名作曲家	生涯	https://ja.wikipedia.org/wiki/	梅岡歌曲会館「詩と音楽」における収録曲数 http://www7b.biglobe.ne.jp/~lyricssongs/COMP/CIDX_DE.htm
ハイドン	1732 – 1809		58
モーツァルト	1756 – 1791		75
ベートーヴェン	1770 – 1827		65
シューベルト	1797 – 1828	約660＋連作歌曲集3	407
メンデルスゾーン	1809 – 1847		74
シューマン	1810 – 1856		264
ブラームス	1833 – 1897		206
マーラー	1860 – 1911		65
ヴォルフ	1860 – 1903		228
R. シュトラウス	1864 – 1949		167

連作歌曲集

D	作品タイトル	作詞	作曲年代
795	美しき水車小屋の娘（*Die schöne Müllerin*）	W. ミュラー（24曲）	1823
911	冬の旅（*Winterreise*）	W. ミュラー（24曲）	1827-1828
957	白鳥の歌（*Schwanengesang*）	L. レルシュタープ（第1～7曲） H. ハイネ（第8～13曲） J. G. ザイドル（第14曲）	1828

［註］「白鳥の歌」は、死の翌年の1829年4月、出版商トビアス・ハスリンガーの手によって出版されることとなるが、その背景にはシューベルトの借金を少しでも返済したいという実兄フェルディナント・シューベルトの計らいがあった。

作詞家については、ドイツの文人であるゲーテ、シラー、ハイネなど錚々たる大家の作品をリートにしている。フランツが５０曲以上も歌曲にしたゲーテについては、ベートーヴェンに対しても無反応を示した以上に、せっかくフランツの友人たちが楽譜を送付したのに、フランツの作品を無視した。この人は、ワイマールの音楽監督として、モーツァルトのオペラには入れ込んだのだが、それも興行のためだったのか、それとも貞操を保ったつもりなのか、元来、音楽に不感症だったのか。なんとなく片輪者だったのではと、私には疑問が晴れない。これほどのフランツの活躍に対して、何の音沙汰もなかった。義理と人情では、極端に私情に偏っていたとしか思えない。だから、ゲーテは、現代まで、私も含めて音楽ファンから歴史的に余り重視されてこなかった。少なくとも私は、ゲーテを読んでみようとも思わない。

文人以外に、友人達の詩や、『冬の旅』で有名になったヴィルヘルム・ミュラーなど、巷（ちまた）に埋没している作家の詩を、積極的に採り上げている。おそらく、フランツの心の琴線に触れたものは殆どリートにしてしまった、と言える。

フランツは、これら歌曲のほか、次のように美しい数多(あまた)の楽曲を作り出した。

交響曲	８曲（未完成６曲）
弦楽四重奏曲	１５曲（未完成１７曲）
ピアノ・ソナタ	２１曲
ヴァイオリン・ソナタ	４曲
ピアノ三重奏曲	２曲
その他の室内楽曲	２５曲（ピアノ五重奏曲「鱒」など）
舞曲（ピアノ曲）	４５曲
その他のピアノ曲（連弾曲も含む）	５７曲（幻想曲、即興曲など）
歌劇	６曲
劇付随音楽	２曲（「キプロスの女王ロザムンデ」など）
教会音楽	８曲（ミサ：６曲など）

＜曲数はおおよその計数になる箇所もある。＞

歌曲数６００曲超を併せると、すさまじい創作エネルギーを感じざるをえない。いったい、何ゆえにこれほど作り続けたのか、煮えたぎる創作マグマの蠢(うごめ)きなのだろうか。火山大国の日本列島のようである。おそらく、楽曲の完成による自己鑑賞において、自画自賛というかシューベルティアーデの友人達からの称賛に喩えようもない歓びを味わったにちがいない。しかしながら、私たちのように好きな音楽に遭遇すると、幾度も聴きたがるナルシズムに耽(ふけ)ることは無かったのだ。そんな凡人的享楽が入る隙間が無いほど、１８年間と言われる短い楽曲創作期間が、びっしりと作品で埋め尽くされているのだから。

これから、そのような創作だらけのフランツの足跡を、飛び石にはなるが巡礼していきたい。

即興曲（Impromptus アンプロンプチュ）　1827年頃（30歳）

シューベルトは、即興曲集を２セット作曲している。作品９０と作品１４２であるが、いずれもこの世のものとは思えないほど、そよ風の奏(しら)べとも言えよう。これら二つでシューベルト感覚が掴(つか)めるといっても過言ではない。

どちらも、ドイツの音楽学者・音楽史家アルフレート アインシュタイン（1880-1952）が「シューベルトがピアノで語った最後のコトバ」、と評している優れた完成品であって、一つ一つがそのまま「小宇宙」を形づくっている。
<https://schubertiade.jp/sub3.htm>

それまで、ベートーヴェンのピアノ・ソナタに染まってきた私にとっては、静かで穏やかな衝撃に驚いた。これほどの情感のコスモスがあったのだ。それ以来、シューベルトが頭から離れなくなった。同時に、己れの行動や姿勢に、いつのまにか抒情を表現しようとする自分を見た。草花を見る目も変化してきた。野原を歩いても、タンポポやスミレを踏みつけることがなくなり、避けながらも何と、見つめているではないか。同い歳の女性に対しても、美形よりも可憐さを追い掛けるようになった。

何事にしても、美とは、陽と陰、明と暗、動と静という対比がないと、見極めることはできない。人は「そんなの趣味だ」ともいうが、絶対に違う。寺社の杜(もり)に、椿に混じってほんのりと咲く侘助(わびすけ)をだれが判じ得ようか。

法華寺の侘助

From <https://blog.goo.ne.jp/tetsuda_n/e/826723093fb145ee587a5c286857faaf>

Op.90 即興曲(D899) 1827年（30歳）頃

第1曲 ハ短調 アレグロ･モルト･モデラート，自由な変奏曲

寂しげな表情のメロディがこの曲の主題として，自由に変奏されていく。

第2曲 変ホ長調 アレグロ，3部形式

トレモロのように滑らかに息もつかせず続く。

第3曲 変ト長調 アンダンテ，3部形式

この不思議な蠱惑(こわく)に満ちた作品90第3曲「変ト長調」は、冒頭の出だしから最後の1小節前まで、一貫して三連符(トリオール)の連なりから成っている。

第4曲 変イ短調 アレグレット 3部形式

素早い分散和音のパッセージ、別名「自殺の即興曲」とも言われている。

From <https://schubertiade.jp/sub3.htm>

３０歳の時の作曲だから、彼の寿命はあと１年ほどしかない。迫りくる死の恐怖はなかったのであろうか。これらの曲を聴く限り、彼は己れの情感を紐解いて、ひたすらに書いたとしか思えない。死ぬまで、そうだったとしか言いようがない。３０歳から３１歳までの２年間は、歌曲集「冬の旅」を筆頭に、余りにも多くの名曲を残したのだ。

だから、即興曲などは、そよ風の中で道草(みちぐさ)を摘(つ)むような感覚で創作したのかもしれない。天才は、凡才の想像を遥かに超える事実は、いつの世も同じだ。

彼が憧(あこが)れたベートーヴェンは、まさに３０歳から「傑作の森」とロマン・ロランに言わしめた創作の絶頂期に入るから、その人生を当てはめれば、シューベルトは登坂の門をくぐるときになるのだが。人の生涯ほど予測が外れるものはない。でも、シューベルトは、そのまま歩み続けたのだ。何のけれんみも無く。

Op.142 即興曲(D935) 1827年（30歳）頃

この作品１４２は、即興曲Ｄ８９９（op.90）のすぐ後に作曲されたが、没後、１０年以上経ってからディアベリ社から出版された。稀代の音楽評論家でもあるシューマンが言ったように、４楽章のピアノ・ソナタを思わせる。たしかに、ヘ短調の第１番に続いて、緩徐楽章としての第２番、ロザムンデ主題による変奏曲の第３番、そしてフィナーレの第４番と考えることもできる。しかし、シューベルト自身が４曲セットにこだわっていた形跡はないと言われている。

第1曲：アレグロ･モデラート。ヘ短調、4/4拍子。

シューマンはソナタ楽章のようだと言ったが、むしろ自由な形式で即興的な性格を存分に発揮している曲である。

第2曲：アレグレット。変イ長調、3/4拍子。

トリオを挟んだ3部形式。やさしく暖かい雰囲気が緩徐楽章を思わせる。

第３曲：アンダンテ。変ロ長調、2/2拍子。

https://www.youtube.com/watch?v=GRkRaUnQmSc

変奏曲形式。主題と5つの変奏から成る。主題は自作の劇音楽「キプロスの女王ロザムンデ」より転用。他に弦楽四重奏曲第13番D804にも使用されている。

第４曲：アレグロ、スケルツァンド。ヘ短調、3/8拍子。

まるでからかうような軽快なリズムで始まるが、中間部はそうしたスケルツァンドな雰囲気とは対照的に、大きくうねった音階が即興的に流れる。

From <https://enc.piano.or.jp/musics/1586>

やはり、第３曲が絶品であろうか。劇付随音楽：ロザムンデの旋律を活用しており、そのメルヘンチックな香りは、小春日和の乾いた南風のようである。シューベルトは、とにかく、入れ込んだ主題旋律は、何度も使うという習性がある。本巡礼では、度々、このことに触れていく。

付随音楽「キプロスの女王ロザムンデ」D.797（管弦楽曲）1824年（27歳）

貧乏な未亡人に育てられた娘が実はキプロスの王位継承権のある姫であり、ある日、突然女王になる。なぜ娘が外に預けられたのか理由はわからないが、一夜で世界が変わっていたとはこのことだ。だが、国には政権を狙う輩がいて陰謀を企てる。彼女との結婚をもくろんだり、挙げ句の果てに毒殺などを。王女の運命やいかに？という危機一髪の所で、若き青年が彼女を救いに来る。

というあらすじであるが、台本は紛失している。

《序曲》 全体は三部に分けられそれぞれが美しいメロディと躍動的な弦楽器や緑の風のような木管楽器で彩られている。

《間奏曲第１番》 序曲とはうって変わり予断を許さない場面設定になるような、つまり悲劇を予感される雰囲気である。

《舞踊音楽　第１番》「間奏曲第一番」と前半は同じであるが、舞曲が展開するにつれて曲の雰囲気は徐々に変わり木管楽器の美しい音色が堪能できる。

《間奏曲　第二番》 ゆったりとした合奏はもの悲しい。常にハーモニーでメロディは進む。弓を使わず指による音で弦がまるで運命が押し寄せるように静かにクレッシェンドしてくる。

《ロマンス「満月は輝き」》 アルト独唱木管楽器の静かな前奏に続き、深いアルトの歌声。前奏は長調なのに歌では一転し短調。これがまた深い叙情的なメロディ。

《亡霊の合唱「深みの中に光が」》 男声合唱男声合唱ファンの皆様、ついにシューベルトの男声合唱曲の登場。

《間奏曲　第三番》 弦楽四重奏曲第13番第二楽章および即興曲op.142-3にも登場する有名なこのメロディ。清涼で暖かな音楽に心奪われる。

《羊飼いのメロディ》 ホルンのシンプルなハーモニーをバックにクラリネットが奏でる間奏曲的存在。だが

不思議な存在感。

《羊飼いの合唱「この草原で」》 混声合唱前の曲と同じようにクラリネットのメロディが先導しホルンに受け継がれる前奏。合唱のハーモニーがとにかく素晴らしい。

《狩人の合唱「緑の明るい野山に」》 混声合唱男声合唱、女声合唱、そして混声合唱と一度に三種楽しめる。題名の通り狩人の合唱。

《舞踊音楽　第二番》 終曲も舞曲。おそらくハッピーエンドの王女と許嫁が舞踏会で幸せに踊る場面なのだろう。

From <http://ongakuyawa.net/musiker21/schubert03.html>

コンヴィクト

フランツ・シューベルトは、家庭内の音楽で育まれた。最初は、ヴァイオリンを任されて、家族どうしの弦楽四重奏などの曲に慣れ親しんだようであるが、既に、７歳頃には親兄弟を追い越してしまった。父は、１４人もの子沢山の実直な教育者であり、ウィーン北の城外に住んでいたから、生粋のウィーン子ではなく、外来者であった。フランツ・シューベルト自身はウィーンという大都市に揉(も)まれながら育ったから、生涯、ウィーンを離れることなく、その町であちこちと年に１度ほど引っ越しながら暮らした、いわば「街のさすらい人」だった。これが、リートにしばしば現れる彼の人生を通じた観念になったとも言われている。

しかも、フランツは、不思議な引力を持ち合わせ、幼少から家族内で音楽教師でもあった兄のフェルディナンドを惹きつけ、弟の飛び抜けた才能を理解してなにやかにやと面倒をみてくれた。人には、何をしなくても人が寄ってくるという不可解な特徴があるものだ。

１１歳（１８０８年）になると、東京藝術大学以上の宮廷礼拝堂聖歌隊（約１５０名）に、たった２名の空きができて、楽才豊かなフランツは苦もなく入学できた。しかも、**コンヴィクト**いう寄宿制神学校であるから、住込みで食費もなにもかもウィーン市まかせの特別待遇生であった。親にとっては、願ってもない奇跡を神に感謝したことであろうが、音楽の世界を動かすほどの天才を産んだ実感はなかったのかもしれない。

当時のコンヴィクト

From <http://www.franzpeterschubert.com/middle_years.html>

コンヴィクトの時代には、フランツはメゾ・ソプラノ聖歌隊員であり、この合唱隊は現在の『ウィーン少年合唱団』に発展していく。その他に、オルガン奏者、代理指揮者など、ありとあらゆる音楽学科を学んだことが、後の作品たちに花咲かせたのである。しかも、既に、習作とされているが、弦楽四重奏曲ほか数十曲も仕上げている。ベートーヴェンに憧(あこが)れ、怯(おび)えながら、交響曲にも１０代の彼の筆は、その作曲に及んでいた。

いつのまにやら、８歳年上のシュパウンという兄貴のような生涯の親友ができていた。他に２，３名の友人もできた。作曲に異常な興味をしめし、それが昂じて五線紙が無くなるとシュ

パウンが分けてくれた。フランツ少年には、すでに魔法のペンがフェロモンのように友達を呼び寄せるように働いていたのだ。やがて、そのペンに加えてピアノが魔法の楽器となる。**シューベルティアーデ**というサロン同好会が、きわめて自然に構成されて行く。

１６歳になると自然に変声期に入り、合唱団から抜けざるを得なくなった。奨励金がつく進学の道はあったのだが、彼から作曲熱が冷めることはなく、コンヴィクトを去ることにした。１年の教員養成課程を経て、以後３年間ほど父の学校の補助教員となった。

追い風のフランツが飛翔する膨大な１０００曲余りの創作のうち６００曲以上を占める歌曲（リート）を中心に話を進めたい。彼の作曲家としての生命線であるから。

糸を紡ぐグレートヒェン　D118　1814年（17歳）

まさに、これこそフランツが産声（うぶごえ）をあげたデヴュー作と言える。１７歳のときの名作であり、美事（みごと）なリートである。

ゲーテ作「ファウスト」において、老人が悪魔メフィストの妖術でもって美男の青年に化けた、そのファウストに弄（もてあそ）ばれて捨てられた乙女グレートヒェンの嘆きを、ゲーテが詩にしたものである。残酷極まりないが、そこが作家の創作というものなのであろう。ゲーテは、わざわざ美少女の悲哀を創り出すのだが、現代でも、カリスマ美青年がこういった彼女の悲劇をつくって、なにくわぬ顔している輩（やから）も少なからずいる。

原詩：**ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ**（Johann Wolfgang von **Goethe**、1749 - 1832）

https://www.youtube.com/watch?v=d9ClvNQEc28

私の嘆きは去り、心は重い。
もうあのやすらぎは帰ってこない。
あの方のおられるぬ所、世は暗闇。
私の心も頭も千々に砕ける。
あの立派なお姿、唇のほほ笑み。
あの方の眼の力、言葉の魔力
そしてあの方の口づけ！

前田昭雄著「シューベルト」より

ピアノ伴奏は、失恋に痛んだグレートヒェンが、心其処（そこ）にあらず糸車を回すさまが同情するように包む。フランツの音楽性は、この伴奏で萎（しお）れたグレートヒェンを美しく飾り付けている。彼の創ったピアノ伴奏は、全歌曲でも共通して大きな魅力であり、ずっと歌に花を添える。残酷なゲーテの仕打ちが、美事に歌曲の逸品として生まれ変わっているのだから、驚嘆しないわけにはいかない。なんという「フランツのいたわりの微風」か。

彼の書いたピアノ伴奏は、写実的に詩の情景を描写する。愕（おどろ）くべきピアノ画才でもある。だから、聴く方に不可思議に背景を彷彿とさせてくれるのであろう。

From <https://www.youtube.com/watch?v=pJhPiPdHTjg&list=RDpJhPiPdHTjg&start_radio=1&t=0>

魔王　Der Erkönig D.328　1815年（18歳）

ゲーテが創った詩は次のとおりで、１８１５年、１８歳のフランツがリートにした。

原詩：ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ　　訳詩　国本静三訳　2015-16年

https://www.youtube.com/watch?v=5XP5RP6OEJI

〈語り〉　だれがこんなに夜遅く風の中を馬を走らせているのだろう。
それはわが子を乗せた父親である。
彼は男の子を腕の中で抱きかかえ、
しっかりと身に寄せてあたためている。

〈父〉「わが子よ、何をそんなにこわがって顔をかくすのか。」
〈子〉「お父さん、魔王が見えないの、
冠をかぶり長い衣を着た魔王が。」
〈父〉「わが子よ、あれはただの霧だ。」

〈魔王〉「かわいい坊や、おいで、一緒に行こうよ。
そしてぼくと楽しい遊びをしよう。
岸辺にはたくさんの色とりどりの花が咲き、
ぼくの母は金の衣をたくさんもっているよ。」

〈子〉「お父さん、お父さん、聞こえないの。
魔王がそっとぼくを誘うのが。」
〈父〉「落ちつくんだ、静かにするんだ、わが子よ。
風が枯葉をざわめかせているのだ。」

〈魔王〉「かわいい坊や、一緒に行こうよ。
ぼくの娘たちは君をやさしく世話をしてくれるよ。
ぼくの娘たちが夜ごと輪になって、
君をあやしゆらし、踊りと歌で眠らせてくれる。」

〈子〉「お父さん、お父さん、あそこが見えないの、
暗がりに魔王の娘たちがいるのを。」
〈父〉「わが子よ、わが子よ、よく見えるよ。
それは柳の古木が灰色に光っているのだよ。」

〈魔王〉「君のことが好きだよ、君のかわいさが俺を強いるのだ。
君が言うことを聞かないのなら、力づくでも連れて行くぞ。」
〈子〉「お父さん、お父さん、今魔王がぼくを掴んでるっ！
魔王がぼくを痛くしたっ！」

〈語り〉　父親は恐怖におそわれ、馬を駆りたて急ぐ。
苦しむこどもを腕の中で抱き、
疲れはてかろうじて家にたどり着くが、
すでに男の子は父の腕の中で死んでいた。

From http://pietro.music.coocan.jp/storia/schubert_satana.html

『魔王』には、「語り手」、「父親」、「息子」、「魔王」の４人の人物が登場する。

フランツのこのリートを聴くと、歌の旋律よりも、伴奏の不気味さに胸が震える。まさに、魔王の妖しさが子供以上に感じられる。この子は、おそらく風邪をこじらせていたのであろうか。父親は、優しさやしとやかさが無く、ただ、寒風をつらぬいて必死に馬を飛ばして先を急いでいる。

シューベルトの友人モーリッツ・フォン・シュヴィント（1804−1871）による挿絵

From <https://ja.wikipedia.org/wiki/魔王_(シューベルト)#/media/File:Erlkoenig_Schwind.jpg>

子が熱に苛（さいな）まれて病魔の幻を見るのだが、それを否定してしまう父親。それが、子の病気を悪化させて、死に至らしめたのだ。男親の一方的な独断的な観念であり、男としての私もひとかたならぬ反省しきりである。子供は、いつも、天女のようないたわりが必要なのだ。だから、いまどきの男女をまぜこぜにした看護師ではなく、どこまでいっても看護婦に看護して欲しいと思うのは私だけだろうか。友人シュヴィントの挿絵（さしえ）の中でも、乙女たちが「そんなに無碍（むげ）にしちゃダメー！」と嘆いている。

やはり、フランツの伴奏付けは、美事に魔王と強情な父を描写している。魔王は、実は父親なのではないか、と考えてしまう。

最近観た、

映画「パガニーニ　愛と狂気のヴァイオリニスト」 2013年

主演・演奏：デイヴィッド・ギャレット

https://www.youtube.com/watch?v=X1uWr0p90EQ

では、この伴奏を採り上げて、不気味さと魔性の響きを実現している。パガニーニの悪魔のようなヴァイオリンの超絶技巧をみごとに演出した編曲の傑作である。

１８１５年、１８歳のフランツは、すでに多くの作曲を成し遂げている。

「交響曲第２番変ロ長調D.125」、「交響曲第３番ニ長調D.200」、
「ミサ曲ト長調第２番D.167」、「ミサ曲変ロ長調第３番D.324」、
オペラ「４年間の宿営D.190」、オペラ「フェルナンドD.220」、
オペラ「クラウディネ・フォン・ヴィラ・ベッラD.239」、
オペラ「サラマンカの友人たちD.326」、そして
「弦楽四重奏曲ト短調D.173」、
ピアノのための「ソナタ　ホ長調D.157」、
「ソナタ　ハ長調D.279」、
その他に146の歌曲もあり、その中に「**野ばら D257**」がある。

野ばら D257 1815年（18歳） https://www.youtube.com/watch?v=OY_sgD2npko

この歌を知らない人がいたら、「世界不思議発見」となる。

私は、小学５年の時に名作映画「野ばら」（ドイツ1957年）を見て感動した。主役はトニーという少年なのだが、歌が上手く、ウィーン少年合唱団に入団してトップ・ボーイ・ソプラノとなる。しかし、天涯孤独の少年には母がいない。そこで、美形の寮母マリアに甘え、他の少年たちをしり目にして、マリアはそれに応えようとするが、やはり、彼女は努めて公平に振る舞う。トニー少年は、それに不満どころかそれを超えてマリアに焦がれてしまう。この少年の切なくもいたいけな慕情は、やがて破裂して事件を起こすが。

From <https://classica-jp.com/program/detail.php?classica_id=CBF1301>

詩が語るとおり、綺麗な花には棘（とげ）がある。花自体（マリア）にあるのではない。その枝に花を守ろうとして棘が付いているのだ。だから、事件はドラマのように起きる。小学生だった私には、そんなこと分かるはずもない。

ゲーテの詩によるものであり、近藤朔風の名訳が二つある。その理由は分からない。はっきりしていることは左の訳詩はシューベルトの曲につけたもので、右の訳詩はウェルナーの曲についたものである。

原詩：ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ　　訳詩：近藤朔風

シューベルトの曲	ウェルナーの曲
童は見たり　野中のばら	童は見たり　荒野のばら
清らに咲ける　その色愛でつ	朝とく清く　嬉しや見んと
あかず眺むる	走りよりぬ
紅におう　野中のばら	ばら　ばら赤き　荒野のばら
手折りて行かん　野中のばら	われは手折らん　荒野のばら
手折らば手折れ　思い出ぐさに	われはえ耐えじ　永久に忍べと
君を刺さん	君を刺さん
紅におう　野中のばら	ばら　ばら赤き　荒野のばら
童は折りぬ　野中のばら	童は折りぬ　荒野のばら
手折りてあわれ　清らの色香	野ばらは刺せど　嘆きと仇に手折られにけり
永久にあせぬ紅におう　野中のばら	ばら　ばら赤き　荒野のばら

From <http://www.bekkoame.ne.jp/~mann1952/lied/nobara.html>

問題は、二つの歌曲「野ばら」の感想である。映画では、ウェルナー曲がメイン・テーマとなる。シューベルトではない。オーストリア・アルプスの野原を背景にした映画では、やはりウェルナー曲が映(は)える。子供心にそう感じた。小学校では、シューベルト曲だった。

しかしながら、シューベルトの「野ばら」を聴くと、明らかにさわやかな風が吹いており、棘さえも和らいで聴こえる。

鱒（ます）D550　1817年（20歳）　https://www.youtube.com/watch?v=AOoyDqGLflE

詩人シューバルト（1739-1791）の詩に曲がつけられた。歌詞の内容は、ずる賢い漁師が罠を使って魚を吊り上げるさまを歌ったもの。

ここでも、美事な伴奏が付いて、私たちに澄み切った谷川を泳ぐ鱒を容易に想像させてくれる。ちなみに、シューベルト『ピアノ五重奏曲「ます」（D.667）』の第４楽章は、この『ます（Die Forelle）』の変奏曲として知られている。

原詩：クリスティアン・フリードリヒ・ダニエル・シューバルト（1739 – 1791）

＜ドイツ語歌詞＞	＜堀内敬三訳詞＞
In einem Bächlein helle,	清き流れを
da schoß in froher Eil	光映（は）えて
die launische Forelle	ますは走れり
vorüber wie ein Pfeil.	征矢（そや）のごとく
Ich stand an dem Gestade	しばしたたずみ
und sah in süßer Ruh'	われ眺めぬ
des muntern Fischleins Bade	輝く水に
im klaren Bächlein zu,	躍る姿
des muntern Fischleins Bade	輝く水に
im klaren Bächlein zu.	躍る姿

From <http://www.geocities.jp/lune_monogatari/forelle.html>

ピアノ五重奏曲 イ長調D667は、シューベルトが1819年（22歳）に作曲した作品である。第4楽章が歌曲『鱒』D550の旋律による変奏曲であるために、『鱒』という副題が付いた。

第1楽章：Allegro Vivace
第2楽章：Andante in F major
第3楽章：Scherzo: Presto

第4楽章：Andantino - Allegretto in D major　＜歌曲『鱒』D550の主題＞

https://www.youtube.com/watch?v=jx57veQRbwA

第5楽章：Allegro giusto

From <https://fischundfang.de/wp-content/uploads/sites/5/old_images/p159380-Seeforelle_lightbox.jpg>

シューベルトは、１８１６年、３年間つとめた教師の職を辞める。その後は音楽の仕事が多くあるわけではなく、シューベルトは貧しい生活を送った。しかし友人たちの支援のおかげで、シューベルトは貧しいながらも、友人たちの暖かい風に囲まれて、幸せにくらしたそうだ。

友人の故郷を訪れたシューベルト

１８１９年夏、シューベルトは約３０歳年上の友人ヨハン・ミヒャエル・フォーグルと共に、フォーグルの故郷シュタイアー（オーストリアの地方都市）を訪れる。

ヨハン・ミヒャエル・フォーグル（1768-1840）とは、オーストリアの歌手・作曲家で、シューベルトの傑作歌曲集『冬の旅』を初演した人物。シューベルトが若くして亡くなった後は、シューベルトの歌曲の普及に尽力した。（フォーグルについては後述。）

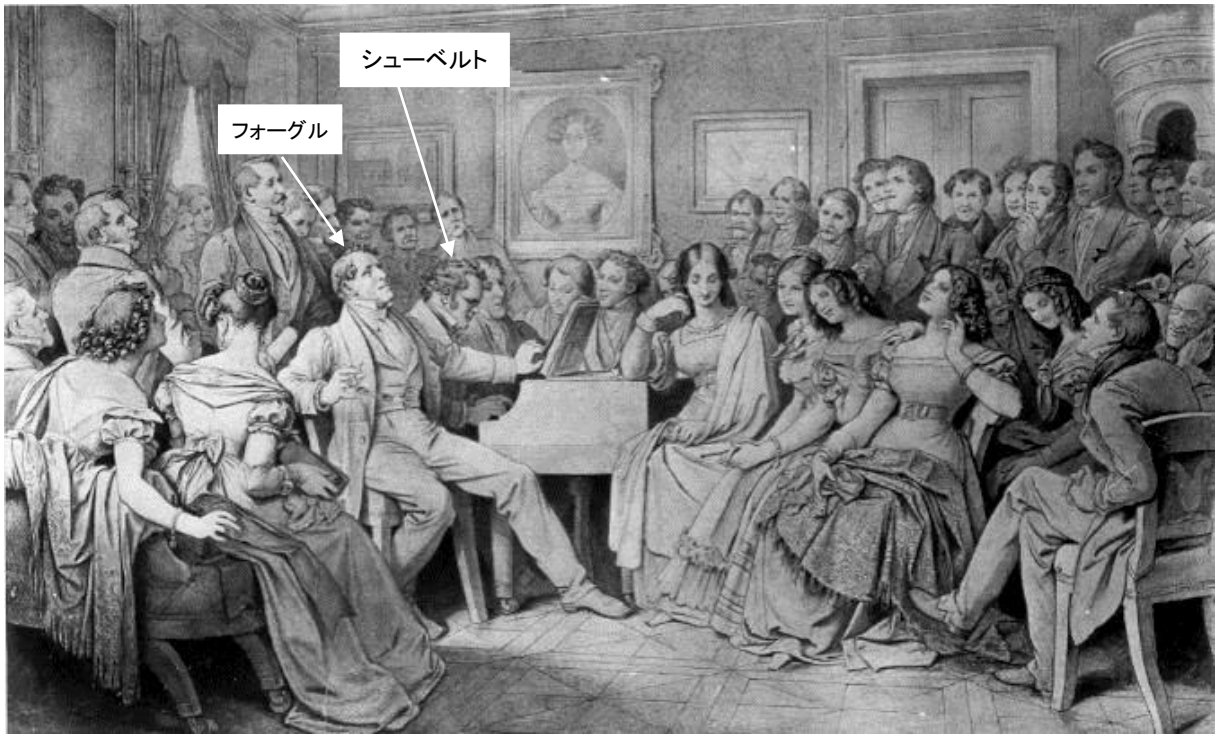
シュタイヤーでシューベルトは、町の裕福な鉱山長官ジルヴェスター・パウムガルトナーと出会う。パウムガルトナーは音楽愛好家で、コンサートを開き自らでチェロを演奏するほど。その依頼人が歌曲『鱒』を大変好んだ。『ピアノ五重奏曲：鱒』は、このパウムガルトナーに

依頼された作品だと考えられている。シューベルトは彼のために鱒のメロディーを取り入れた。ちなみに「ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、**コントラバス**」という通常と異なるピアノ五重奏の編成もパウムガルトナーの希望によるもの、という。

From <https://en.wikipedia.org/wiki/Steyr>

シューベルティアーデ：Schubertiade

シューベルティアーデとは、もともとフランツの周りに知らず知らずに集まった友人たちを言う。彼らの勧めで、私的に開くことになってしまった歌曲リサイタルのことを指すことになった。１８２０年ころ、知名度を高めたフランツのまわりに、多くの芸術家や愛好者が集まった。ワインなどを傾けながら親しく音楽や文学を語り合ったり、フランツを支援していた、親友のシュパウンとショーバー、マイヤーホーファー、ヒュッテンブレンナー、名歌手フォーグルたちが、フランツの新作を演奏、紹介する集い〈シューベルティアーデ〉は、フランツに至福の時だったと言われている。



From <https://de.wikipedia.org/wiki/Schubertiade#/media/File:Moritz_von_Schwind_Schubertiade.jpg>

喜多尾道冬「シューベルト」より:
シュパウン家でのシューベルティアーデの会合。シューベルトの友人モーリッツ・フォン・シュヴィントによるセピア画（1868）。実際には、これだけ集まった会合はなかったが、シュヴィントはメンバー全員を集合させ、シューベルティアーデの親密な雰囲気を伝えている。ここに登場する42人はすべて特定されている。ピアノをひいているのがシューベルト、その左側がフォーグル、譜めくりがシュパウン。壁の肖像画は、エステルハージ侯爵令嬢のカロリーネ。

もともと、フランツには、コンヴィクト時代から周りに友を引き付ける魔法の求心力が働いていた。時代は、ナポレオンがヨーロッパを暴れ回っていたときである。フランツは、小男ゆえにオーストリア軍に徴集されなかったが、その分、あり余る作曲能力を発揮できる場が、多くの知己（ちき）から与えられた。王族・貴族だけの豪華な舞踏会でなく、ウィーンの一般市民は、次第に力をつけて相応の音楽鑑賞という場に渇望し始めていた。それが、ごく自然にシューベル

ティアーデという手っ取り早い、リサイタル同好会を成立させた。しかも、皆が瞠目してしまうほどのフランツの美曲ばかりだから、毎回、盛況を呈した。ショーバーはすすんで自家のフラットを提供したという。このことで、フランツの歌曲が６００曲以上になってしまった理由(わけ)が、歴然とするのではないか。

パリで活躍したショパンも、少し後に、貴族や芸術家の夜会という私的な演奏会が、いつの間にか出来てしまった。現在では、ポップス歌手のディナー・ショーとして定着している。

画家ユリウス・シュミットによる「シューベルティアーデ」 1897年
From <http://blog.livedoor.jp/kzfj0409/archives/77158958.html>

フランツの外見は、身長は低く、どちらかというと肥満体で、ひどい近眼。金銭的にいつも貧しく、友人たちの家を転々とする生活を送り、そのせいかどうか、何日もお風呂に入らなくても平気で、身なりは汚らしかったようだ。 そんな風貌のフランツだが、実際には、彼を応援する友人が大勢いたことから、彼の陽気で楽観的な性格と、その音楽の才能が皆から愛されていたものと推察される。神学校時代の先輩シュパウン、その友人でシューベルトを客人として自宅に招いたショーバー、詩人のマイアホーファー、歌手のフォーグル、そんな仲間がシューベルトを経済的に助け、作品の初演・出版にも力を注いだ。彼は、いつも、友人や知人たちからの支援という心強い追い風に煽(あお)られていた。

結果的に、フランツは自分の周りに、小さなしっかりしたコミュニティを造ることが、楽才とともに天から授かった才能なのであったと言える。モーツァルトやベートーヴェンには、それが無かったから、この二人の大家は予約演奏会を開催したのであろう。

フォーグル

ヨハン・ミヒャエル・フォーグル（1768-1840）は、２６歳でウィーンの有名なケルントナートーア劇場にデビューして以来、トップ・プロとして、圧倒的な人気と実力を誇ったバリトンの名歌手：マイスタージンガーだった。フランツと知り合う頃には、その四半世紀に及ぶオペラ歌手としてのキャリアに終止符を打とうとしていた。ショーバーは、この大ベテランにフランツを紹介しようと画策してフォーグルに接触した。フォーグルは当初「若き天才現るという話はこれまで何度も聞いたが、そのたびに失望してきた。もうそういうことには関わりたくない」と突っぱねたが、他の友人たちの口添えもあって渋々面会を承知した。１８１７年、フランツ２０歳の春から夏にかけての出来事と思われる。

フランツの伴奏に合わせて、はじめは気乗りせずに歌っていたフォーグルだったが、何曲か歌うにつれて次第に熱が入り、この若い作曲家に興味を持つようになった。

「君には見どころがある。でも、君ははったりがなさすぎるし、山気も少なすぎる。とても素晴らしい才能を大切にせず、浪費している。」

と助言して退去したが、意外に、その後しばしばフランツに会いに来て、いつのまにかシューベルティアーデの中心人物に居座ってしまった。やがて、フランツの熱烈な信奉者、サポーターとなり、リート演奏を通してフランツの楽才を世に知らしめる広告塔を買って出た。フランツにとって、この３０歳年上の傲岸（ごうがん）な名歌手こそ、まさに福神様となったのである。

フォーグル：左 と シューベルト：右
（ショーバーによる鉛筆画）

From <http://schubertzyklus.blog.fc2.com/img/201803070148318de.jpg/>

大柄で恰幅の良いフォーグルと、風采の上がらない小男フランツが連れ立って歩くカリカチュア（右）はあまりにも有名である。

フォーグルのフランツへの傾倒は、シュパウンが次のように伝えるとおり劇的である。

「 シューベルトの歌曲からフォーグルが受けた印象は、まったく圧倒的なものであった。彼は自分から我々の仲間に近づき、シューベルトを招いて一緒に練習をした。その演奏は、シューベルト始め我々の仲間に大変な感銘を与えたのだが、フォーグルはそのためにも、なおさら、これらのリートを愛するようになった。彼はそれ以前、音楽を止めようと思ったこともあったと言うが、新たに音楽への情熱を燃やすことになったのだ。（前田昭雄：シューベルト）」

【シュタイヤー】

フォーグルの故郷であるこの町は、上オーストリア州にあり、ウィーンから１７０ｋｍほどのところにある。古い家並みがそろった美しい町という。１８１９年、そこにフォーグルはフランツを伴って、一緒に田舎の夏の乾いた南風に包まれた。オーストリアやスイスにおける夏季ほど湿気のすくない爽やかな気候はどこにもない。

フォーグルの思惑どおり、フランツはシュタイヤーの自然風景に大いに刺激され、美事な

ピアノソナタ第１３番イ長調 D664

https://www.youtube.com/watch?v=HsMHHlDYlMM

を作曲した。これは、コラー家での音楽会でフランツは、次の手紙で感激をあらわした。

「僕の泊っている家には、8人も娘さんがいて、しかもみんな美人だ！　退屈していないことが分かってくれるだろう。僕とフォーグルが毎日食事につくコラー家のお嬢さんはとてもきれいで、ピアノもうまく、リートをいくつか歌ってくれる・・・・・(前田昭雄:シューベルト)」

結果、D664のソナタは、ヨゼフィーネ・コラー嬢に捧げられた。

歌曲「魔王」は、フランツが父親を、フォーグルが魔王を、ヨゼフィーネが子供を歌ったと言われており、田舎の和やかな上流家庭の雰囲気がまざまざと伝わってくる。

さらに、工場主パウムガルトナー家では、

「ピアノ五重奏曲：鱒」D667

が、チェロ奏者でもあるパウムガルトナー氏の依頼で作曲された。その第４楽章アンダンティーノでは、歌曲「鱒」D550が主題として使われた。さすがに、シュタイヤーの澄み切った谷川を悠々と泳ぐ鱒が瞼に浮かぶよう。フランツの楽想には、音楽では余り無い「写実」という強力な特技が息づいているのだ。

フォーグルの期待には、そういった創作をシュタイヤーはフランツに促すはず、と見切っていたことが覗われ、フォーグルの慧眼とともに、フランツへの愛情が薫ってくる。

シュタイヤー：シューベルト滞在

Schubert's holiday spot in Steyr
in Oberosterreich. Lithograph
by Franz Pracher Austrian composer.
1797-1828. Franz Schubert
From
<https://www.alamy.com/schuberts-holiday-spot-in-steyr-in-oberosterreich-lithograph-by-franz-image155404312.html>

夜と夢　D827 1825年頃（28歳）　https://www.youtube.com/watch?v=_IzI0vn8egw

詩は、夜が月明りを空中に差し込むように、夢もまた人々の眠る胸の中に下りてくるのだと歌う前半部分と、夢を満喫した人間が夜明けとともにまた夜と夢の到来を願うという後半部分からなっている。フランツの写実的伴奏は、ゆるやかで静かに波打つピアノのトレモロに乗って、歌声部は、夜や夢が下りてくる様を模したように、高い音から下降していって、夜風が吹き抜けて平安がやってくる

Nacht und Träume　**夜と夢**

神聖な夜よ、おまえは沈み下りてくる、
すると夢もまた静かに歩み下りてくるのだ、
おまえの月の光が空中に差し込むように、
人々の静かな胸の中へと。
人々は喜んで夢に聞き耳を立て、
朝日が目覚めると、こう呼びかける、
また戻っておいで、神聖な夜よ！
いとしい夢よ、また戻ってくるのだよ！

詩：マテウス・フォン・コリン（1779 – 1824）

From https://blogs.yahoo.co.jp/may_bwv244/54899690.html

From http://franzpeter.cocolog-nifty.com/taubenpost/2013/07/d827-983f.html

絶妙な歌いぶりの一番は、なんといっても、あのキャスリーン・バトルのソプラノであろう。さすがに、３０年ほど前にニッカ・ウィスキーのコマーシャルで流れたヘンデルの「オンブラ・マイ・フ（懐かしい木陰よ）」を彷彿とさせてくれる。フランツのなによりも幻想的に薫る伴奏に暗く照らされながら、キャスリーンのオーボエのようなリートが絶品である。

本当に夢の中の夜風につつまれてしまう。

想い出のシューベルト巡礼２　「アルペジォーネ」

2010.1.4，2014.4.15，2018.12.17改　別当　勉

アーモンドの音色であろうか。アルペジォーネとは、比較的大きなギターを弓で弾く弦楽器に改造したものという。ビオラとチェロの中間的楽器であり、19世紀に消えてしまいそうになった幻（まぼろし）の弦楽器である。いまは、数えられるほどの古楽器しか残っていない。現代の演奏では、音域が広いチェロが代用されてきている。

こんな麗（うるわ）しくつつましい楽器に名残（なご）りを惜（お）しむように、シューベルトが『アルペジォーネ・ソナタ:D821』を捧（ささ）げた。僕は、その曲の存在だけは記憶に残したまま、社会人になって世間の荒波に揉まれながらも、浪漫の音楽旅路に、感動を探し続けていた。そして、雑誌の評論を読んだらマイスキーとアルゲリッチの協演が称賛を浴びていたから、聴いたところ、即座に惹（ひ）かれてしまった。

ちょうどＣＤ流通が軌道に乗り出した１９８０年頃であろうか。当時は、ＬＰレコードより高く、確か３２００円／枚であったはずだ。学生時代の飢餓状態からずいぶんと掛け離れた収入があるので、空腹との相談でなく、こんどは家庭との調和となった。随分と趣味への投資感覚のフェーズが変移したものだ。戦略もずるくなり、自分専用のステレオ以外に台所にもミニチュア・セットを置いて女将（カミさん）のご機嫌をとったが、はんぱじゃ見透（みす）かされる。再生音の世界標準機の一つであった英国ＢＢＣのモニター・スピーカー（ブックシェルフ：ロジャース製）だから、さすがに僕の音楽趣味への浪費に甘くなった。

脱線を戻すが、シューベルトのソナタを通して、アルペジォーネの感触が高解像度でハイビジョンのように鮮明に伝わってくる。第１楽章の出だしは、ピアノの第１主題で始まり、流れるような美しい中低音が奏（かな）でられる。まるで、アーモンドの食感みたいな懐（なつ）かしさに溢（あふ）れる。また、ピアノの存在もつつましく、やわらかな伴奏を添えるのだが、僕の愛聴盤の天才ピアニストであるマルタ・アルゲリッチの凄さは抑え気味である。アルゲリッチとのレベル差に背伸びして格闘しているチェロ奏者のミッシャ・マイスキーの熱演も、シューベルトの抒情に包まれてしまうようだ。とにかく、極上の麗（うるわ）しさが醸（かも）し出されている。

第２楽章は優（やさ）しいアダージョである。穏やかというか、冬の日溜（ひだ）まりの干し布団の上で昼寝する感じである。抒情感というのは、何もストレスが無い時にしか癒（いや）しとして作用しないようだ。

第３楽章は、弾（はず）みそうで流れるようなアルペジォーネ（実際はチェロ）のうねりから始まり、いきなり強音で繰り返され、圧倒される。でも、ベートーベンのようにはいかない。シューベルトのリリシズムは自動制御で抑え気味であるから、作家の創作に現れる性格というのは徹底している。第２主題は少し剽悍（ひょうかん）な感じであり面白い。

僕は、シューベルトの核心である歌曲はＣＤが買ってあるのに余り聴いてないから、周辺だけを彷徨（さまよ）っている。これから、勇気を奮（ふる）って三大歌曲、「美しき水車小屋の娘」、「冬の旅」、

「白鳥の歌」に挑戦したい。でなければ、本稿のように行きずりの浅薄(あさはか)な語りは、外国のＴＶドラマの題名で使われたソナタやロンドなどの美麗な言葉利用だけと同じように即座に枯葉になってしまう。敬愛するシューベルトに申し訳ない。すなわち、僕の巡礼の旅は夢の途中なのである。

なお、マルタ・アルゲリッチは、孤高(ここう)の巨匠たちと並んで垂名竹帛(すいめいちくはく)に加わった唯一の女性ピアニストである、と云っても差し支えないだろう。バックハウス、ルービンシュタイン、リヒテル、ホロビッツ、ポリーニなどに、歴史的に伍していける境地に立った、たった一人の女性マエストロにちがいない。

****

「アルペジョーネとピアノのためのソナタ」イ短調D821

https://www.youtube.com/watch?v=zxcmm3ip4iI

は、フランツが１８２４年１１月（２７歳）にウィーンで作曲した室内楽曲である。このソナタは、いかにもフランツらしい美しく抒情的で人気は高い。

もともとこの曲はアルペジオーネという楽器のために作曲されたのでこのタイトルが付いているが、それは一体どのような楽器かというと、次のような外見をしている。

From <http://harucla.cocolog-nifty.com/photos/uncategorized/2017/06/07/arpeggioneseen_edited.jpg>

アルペジオーネは１９世紀前半にウイーンのギター職人シュタウファーによって発明された。チェロをやや小さくしたような形をしていて、同じように足の間に楽器を立てて弦を弓で弾く。一番似ているのはバロックのヴィオラ・ダ・ガンバだろうか。

大きな特徴は**六弦**でチューニングがギターと同じこと、またフレットがあることから「ギター・チェロ」とも呼ばれていた。けれどもこの楽器は世に広く普及することは無く、じきに忘れられた。アルペジオーネのために書かれた曲の楽譜は余り残されておらず、せいぜいフランツのこの作品ぐらい。これほどの情感豊かな曲は、誰のために書いたのだろうか。

フランツの生涯を辿(たど)ると、一つのヒントが現れる。それは、２１歳（１８１８年）のとき、友人のヒュッテンブレンナーから紹介されたエステルハージ侯爵の令嬢の音楽家庭教師である。

彼女らはマリー（１６歳）とカロリーネ（１３歳）の姉妹である。侯爵は、すでに、あのヨーゼフ・ハイドンのパトロンとしても有名であった。

そこで、風光明媚な侯爵の領地ジェリズを訪れ、悧発な姉妹の教師を務めた。シューベルトにとっては、初めて見るハンガリーの地方である。４ヶ月の滞在は、まことに都会の垢(あか)を落すのに、この上なかった。この経験が、カロリーネへの秘めやかな恋心をフランツに抱かせてしまったことは、きわめて自然の成行きとも言えよう。

［註：公侯伯子男とは、公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵のこと。侯爵は伯爵よりも爵位が高い。］

フランツは、１８２４年（２７歳）に、再度、ジェリズを訪れて姉妹に音楽の教授を行っている。帰京後に、『アルペジォーネ・ソナタ』を作曲した。だから、このソナタには幸福に満ちた豊かな田園の情感がまとわり付いている。

侯爵令嬢へのかなわぬ恋心： 四手のためのピアノ曲 「ファンタジア へ短調」D940

https://www.youtube.com/watch?v=0CAImCfSIUA

From <https://blog.goo.ne.jp/kmomoji1010/e/94fdfcd5d7d604afa7849f5ade37d496>

シューベルトが31歳で亡くなる1828年の傑作。シューベルトの数多い連弾曲の中でも、その高度な音楽的内容において飛び抜けている。シューベルトが二度のジェリズ訪問でピアノを教えたハンガリーの貴族エステルハージ侯爵家の下の娘カロリーネに献呈されている。シューベルトは、この東欧の名家の令嬢に切ない恋心を抱いてしまったのだが、その身分の違いゆえに最初からかなわぬ恋とわかっていた。このファンタジアは、その悲恋を音楽として永遠化した結晶なのだ。

カロリーネ

From <https://chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2006-11-24>

たしかに、この曲のえもいわれぬ愛(いと)しさに、思わず聴き惚れてしまう。こんなラブソングが、ずんぐりした小男フランツから寄贈されても、乙女たちはしばらく信じ難い気持ちになる。しばらく連弾で姉妹が幾度も弾いているうちに虜(とりこ)になってしまったのではないか。そして、なんとなく、フランツの中に白馬の騎士（ホワイト・ナイト）がいるような気がして、もてあましたにちがいない。男の私は、彼の内面はまさに王子様だったと夢想している。ただ、ベルリオーズやドビュッシーのような、とてもハンサムとはお世辞にも言えない男達でも、想いを込めた曲を捧げて執拗(しつよう)に迫ることによって美女を手に入れたのだから。と思うと、フランツの矜持(きょうじ)、つまり音楽を利用しないという心根には呆(あき)れるばかり。だから、私たちは、そんなフランツに余計に夢中になってしまうのだ。

死と乙女　D810　1826年(29歳)

この同名歌曲があることを知らずに、この歌の旋律を使った

弦楽四重奏曲第14番「死と乙女」D810 第2楽章 1826年(29歳)

のほうに私の魂は曳き込まれてしまった。身も凍るような悲嘆だろうか。永遠(とわ)の未来を夢見ている、うら若き青年が作り得ようがない。歌曲「死と乙女」D531の作曲から１０年後の作品である。これを聴いて初めてフランツが「死」を意識したことが解かる。２５歳頃に、夜遊びが昂じて、彼は梅毒にかかって入院した。なんとか回復したものの、その後遺症は消えず、若く強靭な身体の免疫力を弱めたため、１８２８年１１月１９日、３１歳の若さなのに、腸チフスで逝ってしまった。

しかしながら、フランツはこのカルテット第１４番D810で、その運命の死神を追い払う決意を込めて、第２楽章を展開する。全４楽章を通じて、奇しくも同年に創られたベートーヴェンのカルテット第１４番op.130を彷彿とするようだ。

第２楽章は、何にも無くなる暗雲を払いのけて晴天を求める展開部のフランツの疾走は、風に涙を振り流して必死にもがいて「安らぎ」を求める。一方、ベートーヴェンは、あの第７楽章で勝利の凱歌を上げきったのに。

フランツは、歌曲の悲しみの主題を提示したあと、低音のピチカートが舞う中で、ヴァイオリンが嘆く変奏で、手を差し伸べたくなるような悲哀が奏される。次の変奏では、自(みずか)ら、この世のものとは思えないほどの優しい「いたわり」を歌い上げる。そして、それら全部を打ち消す激しい打開の意思が、叶わぬように、重いリズムで奏(かな)でられる。でも、悲観は止(や)まない。諦観が見え隠れする。そして、最後は「いたわり」の旋律が声高にあらわれても、ただただ、これからの安穏に消え入りそうに向かう。

フランツは、この後、ひたすらに曲を書き続け、最後のロウソクの灯を燃やし続ける。

しかし、３０歳の彼はベートーヴェンの霊柩車の紐を引いた時に、友人に「自分が死んだらベートーヴェンの隣に埋葬して欲しい」と遺言を残したことは、己れの結末を知っていたのだ。

歌曲「死と乙女」D531は、シューベルトが２０歳頃（1817年）に作曲されたもの。歌詞はドイツの詩人マティアス・クラウディウスの同名の詩から採られ、死を恐れる乙女と死神との短い対話が描写されている。「乙女」と見出しのついた前半部分では、何らかの病を患ったのだろうか、若くして最期を迎えようとしている一人の少女が、迫りくる死の恐怖に恐れおののき、「死神よ、こっちに来るな！」と頑なにこれを拒み続ける様子が歌われている。そして「死神」と記された後半のパートでは、死神は乙女に優しく語りかけ、「私はお前の友だ、私の腕の中で安らかに眠れ」と、甘美な永遠の安息をもたらす存在として描かれている。

原詩：マティアス・クラウディウス

乙女：
あっちへ行け！残酷な死神よ
私はまだ若い　行ってしまえ！
私にさわらないで

死神：
手を取るのだ、美しく可憐な少女よ
私はお前の友　罰しに来たのではない
心穏やかに　私は野蛮ではない
私の腕の中で安らかに眠れ

From http://www.worldfolksong.com/classical/schubert/death-maiden.html

喜多尾道冬『シューベルト』より

・・・・・

これら四つの作品の中で、典型となるのが弦楽四重奏曲《死と乙女》だろう。第一楽章は、はげしい憤怒とも絶望ともつかぬ、絶対絶命の断崖に追い詰められた人間の絶叫をもって開始される。ここには、醜くゆがんだ恐ろしい形相の男が映し出されている。おそらくこれはシューベルトが日記に記している「苦しみだけから生まれた」ような音楽に近いと言えるかもしれない。・・・・・　シューベルトが弦楽四重奏曲《死と乙女》で実現しようとしているのは、自分の苦しみを直視しながらも、それをそのまま人に押し付けるのではなく、愛し得るものとして「変奏」し直す試みである。第二楽章の、同名のリートからの変奏はまさにそれに相当する。リート《死と乙女》そのものには、死の不気味な誘惑への恐れと、死への親しみの複雑なコンプレックスがあらわされていた。そしてここではその深層が幾重にも、プリズム的に映し出されている。

1823年（26歳）7月になると、クーベルウィザーが、詩人のコリーンのところで聞いて知ったのだが、シューベルトが病気だと、ショーバーに手紙を出している。そして、8月に入ると、シュタイヤーに滞在していたシューベルトは、ショーバーに宛てて次のように手紙を書いている。

「シェーファーとは頻繁に連絡をとっている、かなり健康状態は回復している。でも、またすっかりもとの状態に戻れるかどうかほとんど疑わしい。」

シェーファーとは医師で、彼の病気の治療にあたっていた。シューベルト研究者のドイチェは、彼の病気は性病だったのは疑いなく、そのなかでも一番重症の梅毒だった可能性が大きいと見ている。もしそうだとすれば、シューベルトはとんでもない病を抱え込んだことになる。・・・・・　そしてこの病に苦しめられた者は少なくない。哲学者のニーチェ、詩人のヘルダーリンやボードレール、作家のモーパッサンなども、この病の犠牲になったとみなされている。音楽家でもシューマンやヴォルフ、ディートリアスなどが、この病に苦しめられつつ世を去った。

・・・・・

ウィーンには、そのころ1万人もの娼婦がいたという。当時のウィーンの人口が25万人として、いかにも多すぎるようだが、現代のドイツでも8千万人の人口のうち、娼婦は40万人いるという。ベルリンやハンブルグのような大都市に限れば、その割合はもっと多くなるにちがいない。だから、今も当時も娼婦の多さにはそれほどの相違はないと言えるかもしれない。

ともあれ、ウィーンでは結婚の不自由（一定以上の収入・財産が条件）が娼婦をはびこらせる原因のひとつになったのかもしれない。・・・・・　シューベルトもこうした夜の辻君と一夜をともにする機会がなかったとはいえない。彼は1822年（25歳）11月に、「酒、娘、歌」云々を記したが、それから3カ月後には、外出できないほどの身体の不調を訴えることになった。梅毒の症状の第一期は、感染してから三カ月ぐらいであらわれるが、1822年の終わりごろに、彼がこの病に感染する原因となるようなことをしでかした疑いは大きい。・・・・・

問題は、この悪夢の名曲、特に第２楽章変奏曲の聴き方である。フランツの心魂の痛ましさを聴けるかどうかであろう。そのために、私の感受結果を六つの節に分析してみた。

弦楽四重奏曲第14番「死と乙女」D810　第2楽章

演奏:アルバン・ベルク弦楽四重奏団

https://www.youtube.com/watch?v=3Opf-I6sYIg

全曲 （第2楽章:11分30秒後～20分8秒）

第１節　フランツは、歌曲「死と乙女」D531の悲しみの主題を提示して、変奏する。

第２節　そのあと、低音のピチカートが舞う中で、ヴァイオリンがむせび泣く。

第３節　次の変奏では、ヴィオラが、この世のものとは思えないほどの「いたわり」を歌いあげ、ヴァイオリンが、紋白蝶のようにはねる。

第４節　そして、それら全部を打ち消す激しい打開の意思が、叶わぬように、重いリズムで奏でられる。風に涙を振り流して、ひたすらに、はげしく「安らぎ」を追い求める。

第５節　でも、悲観は止まない。諦観が見え隠れする。

第６節　そして、最後は「いたわり」の旋律が声高にあらわれても、ただただ、これからの安寧に消え入りそうに、哀しそうに向かう。

こうして、私流の分節ごとに聴いていくと、何にも言えなくなり、合掌してしまう。

アヴェ・マリア D839 変ロ長調　1825 年(28 歳)

https://www.youtube.com/watch?v=8xXkB-ncF2g&index=1&list=RD8xXkB-ncF2g

余りにも神々(こうごう)しいリートである。

ディズニー・アニメ「ファンタジア」（1940年）の最後を飾る旋律と映像がよみがえってくる。ストコフスキー編曲と指揮による演奏であるが、たしかムソルグスキー「禿山の一夜」の怖ろしい場面につづくのだ。静寂で幻想的な祈りの灯の巡礼行列に、禿山のバケモノで私のさわがしくなった魂が、いつのまにか神妙におとなしくなっていた。

From <https://www.youtube.com/watch?v=8xXkB-ncF2g>

１９８０年代にビデオで観たが、ストコフスキーとウォルト・ディズニーの演出に舌を巻いたことが、まざまざと思い出される。このため、歌曲D839を聴いても、あの瞬間的連想にすべてが打ち消される。むかしラジオ番組で「あのシーンをもう一度」というものがあったように、ラジオなのに映画のシーンの音声と背景音だけで済んでしまう。すさまじい瞬間的連想であろうか、この番組の制作者の炯眼(けいがん)にも驚いている。

ただし、年老いて数多(あまた)のこれらが増幅されると認知症になることもあり得るので、７０歳を過ぎた私は新しい感動を探求して、昔に負けない今を積み重ねている。たびたび、このクラシック巡礼を歩みながら掘り出しものに当たり、新発見をしているように。

フランツは、病魔に悩まされているはずなのに、この無風の静謐な神々(こうごう)しさは何だろうか。聖母マリアを祝福するありさまは、いまにも神々が降臨してくるようだ。

ちなみに、アヴェ・マリアD839の歌詞は次のとおり。

原詩： ウォルター・スコット叙事詩『湖上の美人』より

アヴェマリア
やさしき乙女
お聞きください
一人の目娘の願いを
この険しく荒々しい岩山の上より
わが祈りがあなた様のもとへ届きますように
私どもはやすらきに眠ります。
あさが来るまで。
たとえ、人々が残酷であろうとも。
おお乙女よ、嘆きにくれるひとりの子のことをお聞きください
エヴァマリア。

アヴェマリア
穢れなき(けがれなき)お方
私どもがこの場に伏して眠るときも
あなたの護り(まもり)に包まれてさえいれば
この硬い岩も私どもには柔らかく感じられることでしょう
あなたが微笑めば、バラの香りが漂います。
この湿った岩の隙間にも。
おお聖母様。この子の願いをお聞きください。
おお乙女よ、この娘が呼びかけます。
アヴェマリア

アヴェマリア
清らかな乙女よ
大地と空の悪魔たちもあなたの優しい眼差しのめぐみに追われて
私どものところに住み着くことはできません。
私どもは頭をたれて運命に従いましょう。
私どもにあなたの聖なる慰め(なぐさめ)があるならば
この娘に、身をかがめられてください。
この子、父のために願いをかける物の方へと。
アヴェマリア

From https://blogs.yahoo.co.jp/wolf_orphnoch7733/13897242.html

独訳 ： アダム・シュトルク（Adam Storck）	訳詞 ： 堀内　敬三
Hymne an die Jungfrau	**聖母讃歌**
Ave Maria! Jungfrau mild,	アヴェ　マリア　わが君
erhöre einer Jungfrau Flehen,	野の果てに嘆こう
aus diesem Felsen starr und wild	乙女が祈りを
soll mein Gebet zu dir hinwehen.	憐れと聞かせたまえ
Wir schlafen sicher bis zum Morgen,	御許（みもと）に安らけく
ob Menschen noch so grausam sind.	憩わしめたまえ
O Jungfrau, sieh der Jungfrau Sorgen,	悩めるこの心
o Mutter, hör ein bittend Kind!	君にねぎまつる
Ave Maria!	アヴェ　マリア
Ave Maria! unbefleckt!	アヴェ　マリア　わが君
Wenn wir auf diesen Fels hinsinken	巌（いわお）の臥所（ふしど）にも
zum Schlaf, und uns dein Schutz bedeckt,	君が恵みのもと
wird weich der harte Fels uns dünken.	やすけき夢はあらん
Du lächelst, Rosendüfte wehen	君笑ませたまえば
in dieser dumpfen Felsenkluft,	花の香は絶えじ
O Mutter, höre Kindes Flehen,	たよるべなき乙女
o Jungfrau, eine Jungfrau ruft!	君にねぎまつる
Ave Maria!	アヴェ　マリア
Ave Maria! Reine Magd!	アヴェ　マリア　わが君
Der Erde und der Luft Dämonen,	まがつ日のおそれも
von deines Auges Huld verjagt,	君が御光（みひかり）に
sie können hier nicht bei uns wohnen.	雲と散りて消えん
Wir wolln uns still dem Schicksal beugen,	ひしがれし心を
da uns dein heil'ger Trost anweht;	君がいやしたまえ
der Jungfrau wolle hold dich neigen,	限りなきしんもて
dem Kind, das für den Vater fleht!	君にねぎまつる
Ave Maria!	アヴェ　マリア

From http://www.geocities.jp/lune_monogatari/avemaria.html

この歌曲は、しばしば『シューベルトのアヴェ・マリア』と呼ばれているが、元々この曲は、ウォルター・スコットの名高い叙事詩『湖上の美人』のドイツ語訳に曲付けされたものであり、シューベルトの歌曲集『湖上の美人』の一部である。

物語は、スコットの詩における湖上の貴婦人エレン・ダグラスにまつわるものである。スコットランドのハイランドにおいて、婦人エレンは父親とともに、城主である王の仇討ちから逃れるために、「ゴブリンの洞穴」近くに身を隠している。ダグラス親娘は、王に追放されてからこの方、ハイランドの族長であるロデリックに匿(かくま)われてきたのであった。エレンが、聖母マリアに助けを求めて祈りの言葉を口ずさむと、その声は、氏族を戦いへと鼓舞せんと山深いところにいたロデリックの耳元にも届いた。

《エレンの歌　第3番》は、オーストリアの寒村にあるヴァイセンヴォルフ伯爵夫人ゾフィーの居城で初演されたため、後にこの伯爵夫人自身が「湖上の美人」として知られるようになったという。

この歌曲の開始の文句で反復句であるラテン語「アヴェ・マリア」は、シューベルトの旋律に、ローマ・カトリックに伝統的なラテン語の典礼文を載せるということになったのだ。

From <https://ja.wikipedia.org/wiki/エレンの歌第 3 番>

冬の旅　D911　1827～1828年（31歳）

微風が吹いている。深々と降る雪の中での旅立ちというか、失恋の傷心を抱きながらの逃避行であろう。聴いていると、寒すぎて何も言えなくなる。感情も神経も凍りつく、そんな情景である。それでも詩情は湧いてくる。フランツが己れの人生に終止符を打った。

『冬の旅』は、第１部と第２部に分れているが、第１部は出版され、第２部は死の間際に完成されたという。ぎりぎりの作品であり、フランツの死出での旅路そのものであった。

けれども、若く溌溂としていたときの彼の情念は変わっていない。どこまで行っても、歌人の情感から抜け出さない。凍（こご）えても、センチメンタルな感情は抑えられている。最後までリートの美感を追求する姿勢を貫いた不思議な人である。だから、極限的に美しい。

黄泉（よみ）の手前に来たら、わめき泣き出してしまう私には、語ることが無理である。

シューベルト研究で最も有名な石井不二雄氏（著作は見当たらない）の名解説を掲げるしかない。

ヴィルヘルム・ミュラーの詩による連作歌曲「冬の旅」

ナポレオンにヨーロッパ中を蹂躙されて、1815年のウィーン会議後数十年間は、あくまで政権を奪われまいとする、メッテルニヒ侯爵に指導された王侯貴族たちの反動政策が、政治集会や運動の禁止、出版物や舞台上演台本の検閲、等の徹底した弾圧によって、人々の生活を圧迫し、メッテルニヒのお膝元のウィーンではそれが殊に甚だしく、屋内のダンス・パーティさえ禁止されていた。 ・・・・・

このような暗い時代にあって、「さすらい」を主題とするヴィルヘルム・ミュラーの連作詩「冬の旅」を読んだシューベルトは、その主人公の中に自分自身の姿を見い出したにちがいない。友人シュパウンの報告によると、彼はこの歌曲集の作曲中、ずっと気分が暗く苦しんでいるような感じだった。どうしたのか、という友人の問いに、彼はただ「うん、そのうちに君たちもそれを聞けばわかるよ」と答えるだけであった。ある日、シュパウンに言った、

「今日ショーバーのところへ来てくれ。僕は君たちに一組の恐ろしいリートを歌って聞かせたいんだ。君たちがそれに何というか、とても興味があるんだよ。これには、他のどんなリートの場合よりも、ずっと苦しめられたんだ」。

シューベルトは、自ら感動しながら《冬の旅》を歌ったが、友人たちは即座にはそれが理解できず、その暗い気分に全く当惑してしまい、ショーバーが「一曲だけ、『菩提樹』が気に入ったよ」と言っただけだった。シューベルトは、それに対して、

「僕はこの歌曲集は、どの曲にもまして気に入っているのだ、君たちもいずれは気に入ってくれるだろう」

と語ったという。

そして、その予言どおり、友人たちは間もなくこの陰鬱な歌曲集に夢中になり、そして友人たちばかりか、世界中の人々が真剣にこれを歌い、耳を傾けるようになった。それは、人間の孤独な苦しみがますます深まる一方の時代にあって、この歌曲集が我々に慰めを与え、共感を感じさせてくれるからに他ならない。

シューベルトは、新しい時代の精神的に孤立した人間像に芸術的表現を与えた最初のひとりだったのである。

石井不二雄（於:CDライナー・ノーツ／FSG 50128）

****

ヴィルヘルム・ミュラーの詩による連作歌曲「冬の旅」

石井不二雄 （於：CDライナー・ノーツ／FSG 50128）

第1部	第2部
1．おやすみ	13．郵便馬車
2．風見	14．白い頭
3．凍った涙	15．鴉
4．氷結	16．最後の希望
5．菩提樹	17．村にて
6．雪どけの水流	18．嵐の朝
7．川の上で	19．幻
8．かえりみ	20．道しるべ
9．鬼火	21．宿屋
10．休息	22．勇気を
11．春の夢	23．幻日
12．孤独	24．ライアーマン

楽曲解説

詩人ミューラーと作曲者シューベルト

しかしこの歌曲集は、もちろんシューベルトただひとりの手で成立したものではない。ヴィルヘルム・ミューラーの詩があり、それが偶然シューベルトの手に入ったからこそ、歌曲集《冬の旅》が、その後に生きる我々の財産となったのである。ミューラーとシューベルトは全く離れた場所で生活し、面識も全然なかったが、いくつかの本質的要素を共有していた。まず、ミューラーが1794年生まれ1827年に死んでいるいるのに対し、シューベルトは1797年生まれで1828年没と、両者共ほぼ同じ時代を生きた薄幸の詩人であり、作曲家であったことである。そしてふたり共、憧れ、さすらい、孤独、憂愁、といった主題を好んで扱う。《美しき水車小屋の娘》でも《冬の旅》でも、シューベルトはこの点でミューラーの詩を全く自分のものと感じて作曲することが出来たのである。

ミューラーはドイツ中央部の小都市デッサウに生まれ、5年間ベルリンに出て大学で哲学と歴史を専攻した他は、ほとんど故郷の町を離れず、高校教師と図書館長を務めながら、詩作、翻訳、雑誌編集、百科事典編集等の文学活動に従事した。圧政を憎み自由を愛する純粋な心情の所有者で、1813年のナポレオンに対する祖国解放戦争には自ら志願して従軍し、1821年から6年間続いたギリシャ独立戦争にはバイロンと同様多大の関心を寄せて、「ギリシャ人の歌」と総称される多数の詩編を発表し、「ギリシャ人ミューラー」と呼ばれたりもした。詩集としては、

「**旅する角吹きの遺稿詩集**」第1巻（1820年）と第2巻（1824年）があり、

シューベルトが作曲した「**美しき水車小屋の娘**」は第1巻のほうに、

また「**冬の旅**」は第2巻に収められている。

しかし、「冬の旅」の24篇の詩をミューラーは、全部まとめてはじめてこの詩集したわけではなかった。彼は、最初に出来た12篇の詩をミューラーは年鑑「ウラーニア」1823年版に発表していたが、この年鑑がシューベルトの目にまず止まり、1827年2月に＜おやすみ＞から＜孤独＞に至る12曲が作曲された。しかし、間もなくシューベルトは、全24篇が収められた詩集を知り、未作曲の12篇を1827年10月に新たに作曲して第2部としたのである。第1部は1828年1月に、第2部はシューベルト死後の1828年12月に、トビーアス・ハースリンガー社から刊行された。

11月19日にチフスのため没したシューベルトは、その死の体で第2部の校正の筆を執っていたのである。

《冬の旅》の概要

《冬の旅》の主人公は、恋に破れて孤独の旅に出る失意の青年であるが、それ以上の具体的な状況は全く語られず曖昧なままで、この青年の身分職業でさえ定かでない。しかし、このことはまた、この《冬の旅》が限定された個人のさすらいを超えて、孤独と絶望を感じるあらゆる人の漂白でありえることを示すものであり、普遍的な共感と慰藉（いしゃ）を与えうる保証をなしているのである。

＜☆、★の印は、巡礼筆者のコメント＞

第1部

第1曲　☆☆☆　最高！

＜おやすみ＞は、《美しき水車小屋の娘》の第1曲と同様、旅立ちの歌であるが、元気よく遍歴の旅に出る＜さすらい＞とは異なり、逃げるように急ぐ歩行のリズムと共に、裏切られた娘の家を夜逃げ同然に抜け出す主人公が歌われる。第4節ではそれまでの短調から長調に移って、眠っている彼女を起こさないように、という主人公のいまだにやさしい心遣いが示される。

https://www.youtube.com/watch?v=OJYTbwZ1tos

第2曲　★　なげき

＜風見＞で主人公は、金属板の風見が屋根の上で烈風に鋭い音“ピアノのトリル”を立てているのを見てその音に自分を追い払おうとする悪意を感じ、その揺れ動く様に浮気な恋人との共通性を見い出して、激しい怒りを覚える。歩くうちに流れる涙がすぐに凍ってしまうほどなまぬるいのに慨嘆しては、燃えるような熱さでほとばしれと訴えて。

第3曲　★　暗いが、さわがしい

＜凍った涙＞、一面雪に覆われた野に出ては、そこで春に彼女と楽しい日々を過ごした想い出を無益にも探しながら、胸をえぐるような歌を歌う

第４曲　★　つらい

＜氷結＞。いよいよ恋の想い出に背を向けて町を出る主人公は、次の

第５曲　☆☆☆　最高

＜菩提樹:リンデンバウム＞で、慰めと憩いを約束してくれる菩提樹の葉のそよぎにも必死で耳をふさぎ、突風に帽子を飛ばされても振り返りもせず、ひたすら遠く離れて行く。しかし心だけは相変わらず町に残り、

第６曲　☆　かなしく、せつない

＜雪どけの水流＞では雪の上にこぼした涙が雪どけと共に川を流れて、彼女の家の前まで来れば燃え上がるかも・・・・・とたわいもない空想をする。

菩提樹:リンデンバウム

From
<https://www.symphozik.info/schubert-analyse-de-der-lindenbaum,

第７曲　★　おもいで

＜川の上で＞で凍った川の上に出た主人公は、愛を葬る墓碑銘を氷の上に石で刻みながら、この固い氷を突き破って流れる雪どけの水流を思い浮かべ、自分の心にも固い殻の奥で沸騰する想いを感じて、音楽も盛り上がりつつ第５節を何度も繰り返す。未練を振り切ろうと、町の高い塔が見えなくなるところまで急ぎ足で逃れる

第８曲　★　さわがしく、あわれ

＜かえりみ＞という題名のとおり、想いはすぐに楽しかった過去の日々へと戻ってゆく。

第９曲　☆　妖しく、はげしい

＜鬼火＞で鬼火の誘いに身を委ねた主人公は、深い岩壁の谷間へ、そして運命の深淵の中へと、深く沈む旋律とともに下降する。足を引きずる歩みのリズムに導かれる

第１０曲　☆　いいね、でも後ろ髪を引かれる

＜休息＞では、小屋に入って疲れた身体を休めようとしても、かえって夢中で歩いている時には忘れていた心身の傷がうずき出すばかりで、少しも休息にはならない。放浪者の心にしばしの幸福感を与えてくれるのは、

第１１曲　☆☆　けっこう耳当たりが、いいね

＜春の夢＞で見る楽しい夢だけであるが、それもすぐに鶏のときを告げる声と鴉の叫び声で冷たい現実に引き戻される。

第１部の最後をなす

第12曲 ★ 悲観的

＜孤独＞では、主人公の一見無表情な歩みの中から、突然抑えられていた感情が絶望的な爆発を示す。

第2部冒頭の

第13曲 ☆☆ いいね、伴奏がリズミカル

＜郵便馬車＞で馬のひずめとラッパの響きが聞こえると、もはや諦めたつもりでいても、もしや手紙が！？と青年は、はかなく心を揺さぶられる。ありえないことを待ち望むこの明るい曲想の裏には、深い絶望感が隠されており、mein Herz（わが心よ）という呼び掛けの繰り返しが印象的である。次の

第14曲 ★ 暗い

＜白い頭＞で、はじめてさすらいの目的地としての死が姿を現す。野宿したのであろうか、髪に白く霜が降りたのを見て、主人公は一瞬白髪になったかと喜ぶが、悲嘆の深さからすれば白髪になって当然なのに、いつまでも若さを失わず墓場との距離が相変わらず遠いことを嘆くのである。

第15曲＜鴉＞ ☆☆☆ 可愛い、おもしろい

では、死の象徴とされるこの鳥がずっと離れずに随いてくるのを見て、主人公は最後までその誠実さを示すようにと鴉に訴える。Treue bis zum Grabe（誠実さを墓に入る時まで）と恐ろしい盛り上がりを見せながらかけた死への期待も、しかし電撃的な不協和音によって打ち砕かれ、青年はふたたび鴉への訴えを力弱く繰り返しながら漂白を続けなければならない。

第16曲 ★ ピアノがはねる

＜最後の希望＞では、ひらひらと落ち葉の舞う（ピアノの点描的な描写）木立にところどころまだ付いている枯葉の一枚に、青年は最後の希望を託するが、その葉もはかなく散ってしまう。

第17曲 ★ 吠え声が似合わない

＜村にて＞の夜中の村で、起きているのは主人公の青年と家々の番犬どもだけである。眠って夢を見る人々の虚妄な楽しみに理解を示しながら、もはや夢とも縁のない若者は、犬に吠えられつつ更に当てのない旅を続ける。まだ千切れ雲が飛ぶ空に朝日の紅蓮の炎が差し込む

第18曲 ★ やかましい

＜嵐の朝＞の豪絶な光景、そこに主人公は自分の姿の反映を見る。

第19曲 ☆ 詩的

＜幻＞で若者は、それが鬼火の与えるむなしい幻影であることを意識しながら、そのしばしのまやかしに唯一の楽しみを見いだしている。人を避けて、隠れた道ばかりを探しては歩く主人公に、

第20曲 ☆ ゆれる、なげく

＜道しるべ＞が見えてきて、ふたたび死が意識に昇る。死への道筋を示す道しるべが現れる第4節では、歌も旋律性を失って歩行のリズムだけが残った単色の冷たい世界となる。しかしやはり死は、彼には与えられない。

第21曲　☆　いいね、ただ、しおれた語りがながい

＜宿屋＞で疲れ切った身体を墓の宿に休めたいと願う漂泊者の希望は、結局、受け入れられず、彼は更にさすらいを続ける。

第22曲　☆　がんばれ

＜勇気を！＞で、もう一度最後の、絶望の果ての勇気を振りしぼろうとした主人公も

第23曲　★　やむなし

＜幻日＞では、またも死の世界への願望にとらわれる。しかし最後の

第24曲　☆☆☆　すごい、南無阿弥陀仏

＜ライアー回し＞に至って、青年はようやくその孤独な老人の姿に、自分と淋しい運命を共にしうる真の伴侶を見いだし、同行を申し出るのである。こうして《冬の旅》の主人公は、孤独と絶望の苦しみの中で死を終始願いながらも、ライアー回し（辻音楽師）の老人という道連れを得て永遠の歩みを続ける。この歩みは、もはや主人公の青年個人の歩みではなく、《冬の旅》に耳を傾ける者すべての歩みであり、人間の生そのものの歩みである。

そして、音楽を通じて「冬の旅」の道筋を辿ろうとする者には、歌曲集の主人公がよき道連れとなって、彼にとってのライアー回しの役を果たしてくれることであろう。

【参考】https://blogs.yahoo.co.jp/mieletrose/29473474.html

『ライアーとは正しくはドレーライアー、英語ではハーディ・ガーディと呼ばれる鍵盤擦弦楽器のことで、ヴァイオリンに似た形の楽器を左腕に抱え、右手のハンドルで樹脂を縁に塗った木製の円板を回転させて弦をこすりながら、左手指で鍵盤を押し旋律を奏する。

またこの旋律弦の他に数本の固定弦があって、5度、オクターヴ等で持続音が出るように作られている。

シューベルトの曲で伴奏ピアノの奏する空虚な5度の持続音とその上の単純な単音の旋律は、ライアーの音楽の忠実な模写で、ハンドルを回して弾きはじめる時に音程が不安定になるところまで描写されている。

この詩に歌われているように、ライアーは街頭で喜捨を乞う乞食に主として用いられたが、20世紀に入ってほとんど姿を消した。』

第1曲＜おやすみ＞は主人公が恋人の家を去る歩行のリズムで始まるが、この歩行のリズムが《冬の旅》全曲を通じて様々に形を変えて現れ、青年のその時の歩みを示して、全体を音楽的に統一する役割を果たしている。時には走るように慌しい速足で（＜氷結＞、＜かえりみ＞）、時には疲労してとぼとぼと（＜川の上で＞、＜孤独＞）、時には足を痛めたかびっこを引いて（＜凍った涙＞、＜休息＞）、若者はどこまでも歩きつづける。

この歩行リズムのヴァリエーションは、また同時にその折々の青年の心理状態の反映でもあるが、これに限らずシューベルトは《冬の旅》で、外界の事象と内面の微妙な照応関係を音楽的描写で豊かに示し、この歌

曲集の変化に富んだアクセントを与えている。風に当たって風見の立てる鋭い音は、そこに住む人の心の非情な響きであり、氷を破ってたぎりあふれようとする流れの描写は同時にしゅじんこうの情動の盛り上がりであり、ライアーの単調で空虚な響きはそのまま若者のわびしい心象風景そのものである。その他、失意の若者を慰める菩提樹の葉のそよぎ、夢から現実へ主人公を引き戻す鶏のときの声、恋人の町から来る馬のひづめとラッパの音、希望を託した木の葉のはらはらと散る様子等、ピアノに聞こえる音画的描写はすべて主人公の心理推移の上で重要な意味を持っている。長調と短調の転換、旋律や和声の変形、突然の不協和音の使用、等の技法もすべて主人公の心理の微妙な陰影を反映するものとして用いられている。

****

菩 提 樹

クワ科のテンジクボダイジュの別名。釈迦がその下で悟りを開いたとされ、原産地インドでは無憂樹（むゆうじゅ）・娑羅双樹（さらそうじゅ）とともに三大聖木とされる。

第５曲「菩提樹」が余りにも私たちに浸透しているので、その本来の趣旨を紐解いてみよう。高校生の時に歌った訳詞は、著名な近藤朔風によるもので、とんでもない意訳と翻訳になって原詩の表現を損（そこ）ねている。私たちは、高校の音楽科で習ったとおり「泉に沿いて繁る菩提樹・・・・・」と口ずさめるが、ほぼ翻案になっていることが判明している。

まず、池を想像させてしまう「泉」は「泉水」のことで、沿うほどの池は無い。当時はどこでも町全体を囲む城壁があって、その城門の外にある訪問者への水飲み場としての泉水である。菩提樹は一本しか生えていない。しかも、真冬だから「繁る」どころか葉は落ちて一枚もない。

http://scherzo111.blog122.fc2.com/blog-entry-420.html

次のような正直な訳詞を掲げて、詩が描く情景はどうだったのか眺めてみる。

連作歌曲集 『冬の旅』 第5. Der Lindenbaum　菩　提　樹

https://www.youtube.com/watch?v=M6r6UxAMjhE

訳詩:神崎昭伍

城門の前の泉(泉水)のそばに,
一本の菩提樹がある.
私はその樹かげで多くの甘い夢を見た.

その樹肌に多くのいとしい言葉を刻んだ,
喜びにつけ悲しみにつけ
私はその樹の方へと引かれる思いがした.

今日もまた私は真夜中に
そこを通りすぎることとなった.
そのとき闇こつつまれた中で
私はなおも眼を閉じた.

そして菩提樹の枝はぎわめき
私に呼びかけているようだった.
「私のところへおいで, 友よ,
ここに安らぎがある！」と.

冷たい風がまっすぐに私の顔に吹きつけ,
頭から帽子がとんで行ったが,
私はふりむかなかった.

いま私はあの場所から
何時闇も離れたところにいるが,
ぎわめきはずっと聞こえている.
「あそこにお前のやすらぎがある！」と.

http://www.ongaku1616.com/naniwa-cl/die_winterreise/005.html

梅津時比古『死せる菩提樹』より抜粋

歌いだされる冒頭は、菩提樹の木が「町の門の前」の泉のほとりに立っている。中世以降、欧州の諸都市は、市壁によって囲われていた。
その中の自由な壁内の市民社会から主人公が脱出しようとしている。失恋よりも疎外感の要素が見逃せない。
泉は、原詩でBrunnenと書かれ、これは人工的な泉、すなわち、水飲み場を指す。自然の泉は、Quelleである。
詩における泉は、外れ者のためにもあり、菩提樹を頼りにしていた過去の主人公がみえる。その樹の下から立ち去ることは、一義的には彼女のいる町から離れ去るということであるが、それ以外に「甘い夢」を断つということもうかがえる。彼は落伍者でもあった。
無言の世界で言葉を発しているのは、菩提樹の声である。「私のところへおいで、・・・」と。
極寒の夜に主人公を樹の下に寝かせようとする言葉は、凍死という「安らぎ」への誘いである。
しかし、彼は樹から離れていくが、「あそこに安らぎある」というささやきが尾をひく。

フランツの創作と叙情をふんだんに表わしたリートを、フィッシャー＝ディースカウのふくよかなバリトンで聴くと、おそらくこの世で最も美しいリリシズムが味わえる。とてもじゃないけど泉が「黄泉(よみ)」とは受け取れない。余りにもかけ離れているが、それは、原作者のヴィルヘルム・ミュラーへ贈る、フランツ・シューベルトとフィッシャー＝ディースカウの最高の賛辞ともとれる。厳しい社会と厳冬に対して、落伍者二人、すなわちミュラーとフランツの反撃なのであろう。そのように想像すると、芸術家の想いに柔らかな「修羅」を感じてしまう。

ピアノ三重奏曲 第２番　D929　1827年（30歳）

第2楽章【アンダンテ･コン･モート、ハ短調】

https://www.youtube.com/watch?v=aanDMH7GEZE

いつもながら、私はこの「クラシック巡礼」の旅をしているとき、ふと、見つけた路地裏のひなびた店になにげなく寄っていた。そこはパスタ店なので試しに頼んだペスカトーレに舌鼓(したづつみ)をうった。そのコクのある美味(うま)さに思わず虜(とりこ)にされてしまった。次の日もその次の日も足を運んでいる。なんなんだ、この味の深みは、と疑問しきり。漸(ようや)く、これは私の嗜好にぴたりと当てはまっているのだ、しかも未体験の美味なんだ、と気付いて納得した。その店は、“ハングリータイガー”と言い、その道では超有名なイタリアン・レストランであり、定番メニューが、海老・イカ・アサリの漁師風（塩味）のペスカトーレだ。その辺(あたり)のイタリアン・レストランが千軒束になっても敵(かな)わない。

そんな御馳走に、この私の巡礼で出会ってしまった。フランツの夢心地のピアノ三重奏曲第２番である。１８２７年１１月（３０歳）の作曲とされ、歌曲集「冬の旅」が生み出された時期でもあるが、シューベルトの健康はすぐれなかったという。しかし、頭痛と目まいに悩まされながらも、驚くべき底力で創作を進めたようだ。ただし、特段の気負いもなく、一目散にフランツ・リリシズムで装(よそお)いながら、おどろくほどの歓楽気分で一杯。

その第２楽章と第４楽章は、あのピアノ・トリオの巨峰である、ベートーヴェンの「大公トリオ」に勝るとも劣らない。特別なのは、第２楽章の**【アンダンテ・コン・モート、ハ短調】**であり、その主題が第４楽章で再現される。この世と別れを惜しむかのように第４楽章の演奏時間は、友人たちとの楽し気な団欒と踊りもいれて１５分と長い。温かい風のなかで、フランツの抒情と歓喜が玄妙にブレンドされているから、いくら長くても飽きない。

昔からの音楽評論家の岩井宏之氏（2017年逝去、85歳）も言っている。

「第１番よりこの第２番の方が充実しており、親しみがもてるだけでなく、音楽としてのスケールが大きい。（略）わけても第2楽章**アンダンテ･コン･モート**は、シューベルトの室内楽のエキスといっても過言ではない。」

なんといっても、私は、ほがらかな風につつまれる第４楽章アレグロ・モデラートに傾倒している。確かに絶品である。

ピアノ三重奏曲第２番 変ホ長調 D929　の構成。

第1楽章 アレグロ、変ホ長調、ソナタ形式

第2楽章 **アンダンテ・コン・モート**、ハ短調、三部形式

第3楽章 スケルツァンド、アレグロ・モデラート、変ホ長調、三部形式

第4楽章 **アレグロ・モデラート**、変ホ長調、ロンド・ソナタ形式

交響曲第９番「ザ・グレート」　D944　1828年(31歳)

https://www.youtube.com/watch?v=jiE64mHFw5M

シューマンをして「天国的な長さ」と言わしめた交響曲である。

この第９番ザ・グレートの作曲に着手したのは１８２５年であり、死の年である１８２８年の３月に完成をみた。そのスコアは世に出ることなく、兄フェルディナンドのもとで長い間眠っていたが、死後１０年ほど経って、フェルディナンドを訪ねたロベルト・シューマンがこの未発表の交響曲の存在を知り、彼の斡旋で、１８３８年、メンデルスゾーン指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団により、この交響曲は初演された。とたんに、名曲として世評の称賛を浴びたが、本人はもうこの世にいない。

歌曲集「冬の旅」の作曲時期と重なっているから、彼の最後の力を振り絞った逸品とも言える。向かい風の中で、悠々と自分の終着駅に向かう。フランツの身になってみれば、何が何でも悔いのない完成品にしたかったのだろう。

私がこの名曲に遭遇したのは、学生の頃で、その麗しさとグイグイと迫ってくるシューベルトの抒情風に圧倒され、胸がふるえた覚えがある。フランツのリートに聴き入っている現在、あらためて聴くと、彼が創作した全作品に通じるおおらかな情感が、まるでカタログのように詰め込まれていることが分かる。すなわち、これを「総合＝インテグレーション」という。彼は、成し遂げたのだ。ベートーヴェンが第九「合唱」で己れの生き様を歓喜して叫んだように。

構成

第1楽章 Andante - Allegro ma non troppo

ハ長調、2/2拍子、序奏付きソナタ形式(提示部リピート付き)

第2楽章 Andante con moto

イ短調、2/4拍子、展開部を欠くソナタ形式の緩徐楽章

第3楽章 Scherzo. Allegro vivace

ハ長調、三部形式、3/4拍子の大掛かりなスケルツォ

第4楽章 Finale. Allegro vivace

ハ長調、2/4拍子、自由なソナタ形式

なお、第９番は、近年のフランツの交響曲研究により第８番と呼ぶことになったようだが。私は、第８番が未完成交響曲だったので、第９番と呼ぶことにこだわっている。いずれにしても、交響曲に限らず数々の未完の楽曲が多く発見されてきたので、いまさら呼称を正確にするとしてもこの先すら危(あや)うい。ＣＤ発行社も「交響曲第９（８）番」と表記して、最初にクラシック・ファンに浸透してしまった第９番を大事にしている。

さて、第９番までの足跡はどうだったのか。**「ベートーヴェンの後に何ができるか」**とぼや

きながらも、９曲も書いたのだが。未完成も併せて、彼の年齢に沿って整理してみる。

完成	未完成	備考
	1811年(14歳)　ニ長調:D2B	ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン(初期)の影響を受けて、みごとな習作である。特に、ソナタ形式の学習として、作曲技術が成長したと言われている。
1813年(16歳)　交響曲第1番:D82		
1814年(17歳)　交響曲第2番:D125		
1815年(18歳)　交響曲第3番:D200		
1816年(19歳)　交響曲第4番:D417		
1816年(19歳)　交響曲第5番:D485		
1818年(21歳)　交響曲第6番:D589	ニ長調:D615	第3楽章はメヌエットの替わりにスケルツォを採用し始めている。第6番のスケルツォは、ベートーヴェンの第7番イ長調に似ている。
	1820年(23歳)～　ニ長調:D708A	
	1821年(24歳)　ホ長調:D729	
＜交響曲第8(7)番＞右掲	1822年(25歳)　ロ短調:D759	
？？？？？　減退／イノベーション意欲の蓄積　？？？？？		
1826年(29歳)　交響曲第9(8)番:D944		充実、スケール拡大
	1828年(31歳)　ニ長調:D936A	

未完成のロ短調は、神妙な楽想で有名になりすぎた。昔は、「運命」と「未完成」のセットでＬＰ１枚が組まれて発売されるのが常套だった。私も駆け出しのクラシック・ファンとして、きっちり「運命」を吸収しなければと一途に思って、ブルーノ・ワルター盤を買いこんで聴いたが、「未完成交響曲」の暗さと生ぬるい風に辟易した覚えがある。第２楽章の田園風景によって宥められるが、感動するには程遠い。スケルツォの第３楽章やアレグロの第４楽章が続かないからであろう。やはり、未完の宿命であるが、確かに完成されたなら第９番に劣らぬ名曲として称えられたものと容易に想像がつく。

未完成交響曲は、１８２２年に着手し、第２楽章までの未完成譜のまま、第３楽章はピアノのスケッチがあるだけ。１８２４年ごろ、グラーツの音楽協会に名誉会員として推薦されたシューベルトは、その返礼として、フランツの友人でもあり、同協会の役員だったアンゼルム・ヒュッテンブレンナーに２楽章までの自筆譜を届けたそうである。しかしながら、ヒュッテンブレンナーは後で残りの楽章が届くものと思い、彼の手元にとどめていた。この自筆譜の存在は忘れ去られて、１８６５年にウィーンの指揮者ヨハン・ヘルベックが発見し、同年１２月に初演するまでのほぼ４０年間も眠っていた。

どうして、完成されずに放置されたのか。その真実は誰も知らない。ただ、まるまる３年間

のフランツの交響曲作曲に係る休眠は、おそらく病魔に侵された時期と重なることである。かなりのショックに苛まれたにちがいない。そういう見方もできるだろう。

あるいは、フランツの興趣がオペラ作曲に向けられたのではないか、という仮説も成り立つ。

彼は、オペラにも異常なほど情熱を傾けたが、成功裏になしえたものはない。１８２３年には、「謀反人たち D787（後に「家庭争議」と改名）」、「フィエラブラス D796」などが手掛けられた。しかし、ウィーンの風は、ロッシーニやウェーバーの方に圧倒的に吹いていた、という背景もある。いずれにしても、素人の憶測でしかない。

ピアノソナタ第２０番 D959 第２楽章　1828年（31歳）

https://www.youtube.com/watch?v=5h8Rj8XDu4s

ピアノソナタは、私の定番の曲種である。

このジャンルこそ、ベートーヴェンに鍛え上げられた私の眼力（がんりき）の一つであり、まさに作曲家を素人評価する場合に、避けては通らない分野なのである。しかしながら、ショパンもシューマンもブラームスも、そろって３曲書いただけで、避けてしまった。難関なのか人気がないのか、それともベートーヴェンに敵（かな）わないと畏敬の念を抱（いだ）いたのか解らない。リストは、かろうじて単一楽章の名曲「ロ短調ソナタ」１曲だけ残したが、なぜか一箇のソナタ形式の幻想曲のようなものに聴こえる。

だが、フランツは、何の気張りもなく、書き続けて２１曲も残したのだから、他のロマン派作曲家とはちがって、彼はベートーヴェンに畏（おそ）れるよりもひたすらに心酔した。それでいいのだ、と思ったのであろう。

生の終末がせまる１８２８年９月、遺言のように

第１９番:D958 ハ短調

第２０番:D959 イ長調

第２１番:D960 変ロ長調

と三曲書き上げた。ベートーヴェンさえも脱帽せざるを得ないほどの逸品である。あとに続く音楽家たちがピアノソナタを忌避したのがわかるほど。そして私は、みごとに第２０番に嵌（はま）り込んだ。

その第２楽章（嬰ヘ短調）アンダンティーノでは、『冬の旅』の疲労困憊（こんぱい）と凍傷を癒（いや）すように、己れの魂をいたわる。ふんわりと風がまとわるその天女のやさしさは、喩（たと）えようもない。中間部で、荒（すさ）んだこころは激しく痛んで暴れるが。また、この上ない天女の風の優しさで包む。私はこの第２楽章を聴いて、萎（しお）れた気分が幾度救われたか数えきれない。フランツは、そういう人だった。絶えず、要所で喩（たと）えようもない「いたわり」を表わしてきた。

第１９番の第４楽章アレグロ～プレストは、夢想的で心躍るタランテラ*もどきであり、ベー

トーヴェンの第１７番「テンペスト」第３楽章を連想させてくれるから、喜々として聴いてきた。それが私のクラシック巡礼の出発点であったことは、第１巻「ルードヴィッヒの夢」で述べたとおり。

［* タランテラは 8分の3拍子または8分の6拍子のテンポの速い舞曲のこと。］

第２１番は、尤（もっと）もフランツらしい。しかも、録音は一番多く、プロのピアニストが好んで採り上げるようだ。確かにきれいだが、何度聴いても、私には第２０番や第１９番のようにそれほど深く響いてこないが、ながらで聴くにはこの上ない。

なぜか、これら３曲を聴くと、フランツは音楽の女神ミューズ（ミュージックの原語）の殉教者であったのではないかと考えてしまう。

エピローグ

人は、フランツを歌曲王と言うが、本当に６００曲を聴いたのか。

これに近い人が一人だけいる。ディートリッヒ・フィッシャー＝ディースカウという名歌手がその人である。軽々しいリスナーではなく、リートの世界で断トツのバリトン・マイスタージンガーである。彼のシューベルト歌曲全集はＣＤ２２枚組だから、おそらく５００曲ほど録音したのだ。気が遠くなる。それほど彼はフランツに執心した。

蓋し、「捧げる」とはこういうことなのだ。

そんな現実を知ると、私は、自分がいかに矮小か思い知らされる。でも、私なりに思い出して、また聴いて、つづって、巡礼してきた。比較してはいけないが、一小市民として書かせていただいた。

そのうえで、フランツの人生をプロファイリングすると、家族、才能、友人という３点が緊密につながって、彼が存在した、と言える。ほどほどの中流家庭の微笑ましい音楽環境で育まれ、天賦の才能が芽吹いて、友達がそれを賞味しながら育成した。しかも、彼は、作曲技術においては、情景の写実という夢のような術を携え、加えて情感の表出という芸術家の肝となるリリシズムを、あふれるほど持っていたことには驚きを禁じ得ない。

また、作曲依頼よりも自発的創作というエネルギーを持て余すかのように、おびただしい数の楽曲を作り出した。金にならない未出版の曲が多いのもこのせいではないだろうか。

昨今のＡＩロボットを例に掲げてみよう。百円玉を一つ入れたら１曲できた、というようなものを作ったとしたら、まさに、それは“シューベルボット”と名付けられるかもしれない。しかし、喜怒哀楽という情緒の選択ボタンは、その器械に誰も付けられない。

そんな空想に戯れてしまうほど、彼は金銭と栄誉にこだわりなく、詩文の短冊を作曲スタートの投入口に入れた途端に、創作し始めた作曲家であった。しかも、埋もれてしまった物凄い数の楽曲化石に何の未練も残さず、風とともに冬の旅に出てしまった。

このことは、後世の私たちのために無数の「楽興の時」を、無償で印税なしでプレゼントしてくれたのだ、と人は言うかもしれないが、彼のめくるめく苦楽を少しでも理解しない限り、それは余りにも身勝手すぎる。私も慎むべきである。

＜参考図書等＞

No.	題名	著者	発行元
1	シューベルト	喜多尾道冬	朝日選書
2	シューベルト　生涯と作品	藤田春子	音楽之友社
3	フランツ・シューベルト あるリアリストの音楽的肖像	ハンス・ヨアヒム・ヒンリクセン 訳：堀　朋平	㈱アルテスパブリッシング
4	シューベルト（カラー版）	前田昭雄	新潮社
5	死せる菩提樹 シューベルト《冬の旅》と幻想	梅津時比古	春秋社

DVD

6	未完成交響楽	1933年 ドイツ=オーストリア作品	販売元: IVC,Ltd.